

平成 24 年度

久留米市内遺跡群

塚 崎 遺 跡 (第 1 次 調 査)

西 海 道 跡 (第 3 次 調 査)

善 導 寺 境 内 遺 跡 (第 10 次 調 査)

久留米城下町遺跡 (第 19 次 調 査)

白 口 経 塚 遺 跡 (第 8 次 調 査)

辻 遺 跡 (第 6 次 調 査)

南 薫 西 遺 跡 (第 7 次 調 査)

正覚山浄土寺飯田庵跡 (第 1 次 調 査)

久留米城外郭遺跡 (第 20 次 調 査)

平成25年 (2013) 3 月

久留米市教育委員会

平成 24 年度

久留米市内遺跡群

塚 崎 遺 跡 (第 1 次 調 査)
西 海 道 跡 (第 3 次 調 査)
善 導 寺 境 内 遺 跡 (第 10 次 調 査)
久 留 米 城 下 町 遺 跡 (第 19 次 調 査)
白 口 経 塚 遺 跡 (第 8 次 調 査)
辻 遺 跡 (第 6 次 調 査)
南 薰 西 遺 跡 (第 7 次 調 査)
正覚山浄土寺飯田庵跡 (第 1 次 調 査)
久 留 米 城 外 郭 遺 跡 (第 20 次 調 査)

平成25年 (2013) 3 月

久留米市教育委員会

序

筑後平野の中心に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と耳納連山の山並みに代表される水と緑が豊かな都市です。また、国道3号、九州新幹線、JR鹿児島本線、九州縦貫自動車道が集まる交通の要所でもあります。この恵まれた環境と立地は、古来より人々の生活や社会・文化に多大な影響を与えてきました。

今回、報告する遺跡は、平成23・24年度に市内各所で発掘調査が実施されたものです。弥生時代の集落である塚崎遺跡、古代官道の推定路線での調査となった西海道跡、中世の集落もしくは寺院に関連すると見られる善導寺境内遺跡、現在の町並みの基礎となった久留米城下町遺跡、古墳時代の集落跡・白口経塚遺跡、弥生時代の集落遺構と遺物を検出した辻遺跡、奈良～平安時代の集落である南薫西遺跡、中世寺院の存在が伝わる正覚山浄土寺飯田庵跡、近世久留米城の一角を調査した久留米城外郭遺跡、以上9遺跡の本報告および概要報告を収録しております。

本書が、久留米の歴史を学ぶ基礎資料として、また、文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました地権者の方々をはじめ、関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成25年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、平成23・24年度に久留米市市民文化部文化財保護課が国・県の補助を受けて実施した久留米市内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市市民文化部文化財保護課が久留米市教育委員会より委任を受けて発掘調査を行い、小澤太郎・神保公久・熊代昌之・廣木 誠・江頭俊介・西 拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した遺構測量は、調査担当者と塚本明美・森 啓恵・堀田秀実が行った。測量は主にトータルステーションで三次元データを取得し、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くんCubic」にて編集・保存している。また、遺物実測・拓本、製図作業は調査担当者と非常勤職員の古賀和子・中里由佳絵が行ったが、一部デジタルトレースを導入している。
4. 空中写真を除く遺構写真は各担当者が撮影した。遺物写真は、辻遺跡および白口経塚遺跡については文化財写真工房に委託し撮影を行った。その他の遺物については埋蔵文化財センターにおいて調査担当者が撮影した。
5. 本書に使用した遺構図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成した。図版の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。
S B……掘立柱建物 S D……溝状遺構 S K……土坑 S P……ピット
7. 遺構観察表の凡例は下記のとおりである。
※法量の単位は cm である。また、括弧内の数値は復元値及び現存値を示す。
※色調は『新版標準土色帳』（日本色研事業株式会社発行,1997・1998年版）による。
※胎土は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1 mm未満を細砂粒、1 mm以上については砂粒とした。
8. 各遺跡の調査番号、遺跡略記号は第1表に記している。遺跡略記号については（略記号）－（調査回数）の順で記載している。
9. 本書に収録した遺物及び調査に係わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
10. 本書の執筆は各担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は担当者間で協議の上、小澤が担当した。

本文目次

I. はじめに	(小澤)	1
II. 塚崎遺跡第1次調査	(小澤)	3
III. 西海道跡第3次調査	(小澤)	11
IV. 善導寺境内遺跡第10次調査	(小澤)	15
V. 久留米城下町遺跡第19次調査	(熊代)	19
VI. 白口経塚遺跡第8次調査	(江頭)	24
VII. 辻遺跡第6次調査	(廣木)	29
VIII. 南薫西遺跡第7次調査(概要報告)	(神保)	35
IX. 正覚山浄土寺飯田庵跡第1次調査(概要報告)	(西)	36
X. 久留米城外郭遺跡第20次調査(概要報告)	(小澤)	37
〔巻末〕抄録		38

挿図目次

II. 塚崎遺跡第1次調査

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	4	第6図 SK15遺物出土状況(南西から)	9
第2図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	4	第7図 SK20遺物出土状況(南から)	9
第3図 調査区遺構配置図(1/50)	5	第8図 SD1全景(南から)	9
第4図 出土遺物実測図(1/4、3のみ1/2)	7	第9図 出土遺物写真	10
第5図 調査区全景(東から)	9		

III. 西海道跡第3次調査

第10図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	12	第14図 調査区全景(西から)	14
第11図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	12	第15図 調査区北壁土層(南西から)	14
第12図 調査区遺構配置図(1/150)	13	第16図 調査区南壁土層(北西から)	14
第13図 調査区全景(東から)	14		

IV. 善導寺境内遺跡第10次調査

第17図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	16	第20図 調査区全景(西から)	18
第18図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	16	第21図 調査区土層(北から)	18
第19図 調査区遺構配置図(1/50)	17		

V. 久留米城下町遺跡第19次調査

第22図	調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000) ……	19	第28図	S D 1 完掘状況 (北東から) ……	23
第23図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……	20	第29図	S D 1 土層堆積状況 (南から) ……	23
第24図	調査区遺構配置図 (1/100) ……	21	第30図	S D 1 西側石組状況 (東から) ……	23
第25図	調査区全景 (東から) ……	23	第31図	S D 1 出土遺物 ……	23
第26図	S D 1 上面検出状況 (南から) ……	23	第32図	S D 1 裏込出土遺物 ……	23
第27図	S D 1 完掘状況 (南から) ……	23			

VI. 白口経塚遺跡第8次調査

第33図	調査地点と周辺の遺跡分布図 ……	24	第38図	S D 39完掘状況 (北西から) ……	27
第34図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……	25	第39図	S D 39土層断面 (南東から) ……	27
第35図	出土遺物実測図(1/4) ……	26	第40図	調査地点から見た御塚古墳 (東から) ……	27
第36図	調査区遺構配置図 (1/100) ……	27	第41図	出土遺物写真 ……	28
第37図	調査区全景 (西から) ……	27			

VII. 辻遺跡第6次調査

第42図	調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000) ……	29	第47図	S B 1－P 1 土層断面 (南西から) ……	33
第43図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……	30	第48図	S B 1－P 2 土層断面 (南西から) ……	33
第44図	調査区全景 (東から) ……	31	第49図	出土遺物実測図 (1/4・2/3) ……	33
第45図	調査区遺構配置図 (1/100) ……	31	第50図	出土遺物写真 ……	34
第46図	S B 1 実測図 (1/40) ……	32			

VIII. 南薫西遺跡第7次調査（概要報告）

第51図	調査地点の位置図 (1/25,000) ……	35	第52図	調査地全景 (北東から) ……	35
------	------------------------	----	------	-----------------	----

IX. 正覚山浄土寺飯田庵跡第1次調査（概要報告）

第53図	調査地点の位置図 (1/25,000) ……	36	第54図	調査区全景 (南東から) ……	36
------	------------------------	----	------	-----------------	----

X. 久留米城外郭遺跡第20次調査（概要報告）

第55図	調査地点の位置図 (1/25,000) ……	37	第56図	調査区全景 (南から) ……	37
------	------------------------	----	------	----------------	----

表 目 次

第1表	『平成24年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表 ……	1
第2表	(久留米城下町遺跡第19次調査) 出土遺物観察表 ……	22
第3表	(辻遺跡第6次調査) 出土遺物観察表 ……	33

I. はじめに

1. 平成24年度実施調査の概要

久留米市では平成5年度より市内遺跡発掘調査等国庫補助事業により発掘調査を実施した遺跡について『久留米市内遺跡群』として成果を取りまとめ、報告書を刊行している。

平成24年度の市内遺跡発掘調査等国庫補助事業対象の調査は29件で、調査原因は専用住宅建設が22件、埋蔵文化財包蔵地内における確認調査が5件、その他2件である。

本年度の報告については、平成23年度に実施した塚崎遺跡第1次調査・西海道跡第3次調査、善導寺境内遺跡第10次調査及び、平成24年度に調査した久留米城下町遺跡第19次調査・白口経塚遺跡第8次調査・辻遺跡第6次調査の本報告を行う。また、あわせて平成24年度に調査を実施した箇所のうち、南薫西遺跡第7次調査・正覚山浄土寺飯田庵跡第1次調査・久留米城外郭遺跡第20次調査の概要報告を収録している。これら遺跡の報告書作成に係わる整理作業は、西町文化財整理事務所・筑後国府跡発掘調査事務所において実施した。

この他、平成23年度末に実施された下馬場古墳第2次調査（SBB-002/201119）については、平成25年度に単独で報告書刊行予定のため掲載を割愛している。また、竹の子古墳群第1次調査（TKV-001/201236）、二子塚遺跡第7次調査（HTG-007/201240）等を実施したが、時間的な制約から次年度以降に報告を掲載する。

第1表 『平成24年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表

調査年度	調査番号	遺跡名	調査回数	調査期間	調査面積	担当者	調査原因	遺跡略記号	備考
H23	201113	塚崎遺跡	第1次調査	20111018～20111028	17m ²	小澤太郎	確認調査	TKZ-001	本報告
H23	201116	西海道跡	第3次調査	20111116～20111124	52m ²	小澤太郎	確認調査	SKD-003	本報告
H23	201122	善導寺境内遺跡	第10次調査	20120319	23m ²	小澤太郎	確認調査	ZNK-010	本報告
H24	201203	久留米城下町遺跡	第19次調査	20120419～20120427	36m ²	熊代昌之	確認調査	LKM-019	本報告
H24	201209	白口経塚遺跡	第8次調査	20120525～20120531	40m ²	江頭俊介	専用住宅	SKT-008	本報告
H24	201219	辻遺跡	第6次調査	20120808～20120817	53m ²	廣木 誠	専用住宅	TUJ-006	本報告
H24	201208	南薫西遺跡	第7次調査	20120522～20120604	48m ²	神保公久	専用住宅	NKN-007	本報告
H24	201222	正覚山浄土寺飯田庵跡	第1次調査	20120823～20120831	64m ²	西 拓巳	専用住宅	SKJ-001	概要報告
H24	201224	久留米城外郭遺跡	第20次調査	20120829～20120831	14m ²	小澤太郎	専用住宅	LNG-020	概要報告

2. 調査の体制

平成24年度における久留米市内遺跡群発掘調査等国庫補助事業に係わる調査の体制は以下のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	堤 正則
調査総括：久留米市市民文化部	部 長	辻 文孝
	次 長	佐藤 光義
文化財保護課	課 長	古賀 正美
	課長補佐	宮崎 俊一（兼主査）・園井 正隆
	主 査	白木 守・辻 義則
	庶務担当	豊福 早苗
	事前確認・調整担当	本田 岳秋・小澤 太郎
	調査・報告書作成担当	小澤 太郎・神保 公久・熊代 昌之
		廣木 誠・江頭 俊介・西 拓巳
	整理担当	古賀 和子（非常勤職員）
		米澤美詠子（非常勤職員）
		中里由佳絵（非常勤職員）

出土品整理作業臨時職員

秋吉 順子・荒木真智子・井上千恵美・石崎 玲子・岩村万喜子・小本美沙子・枕島かおり
古賀 啓子・小林 敏江・阪柿 友紀・野中 衣子

発掘調査作業員

平成23年度（塚崎遺跡第1次調査・西海道跡第3次調査・善導寺遺跡第10次調査）

秋吉 力・緒方 具美・勝田美代子・鐘ヶ江 清・合戸 喬一・末安 茂喜・杉山 光恵
塚本 明美・津留崎利子・原口 貞子・細江チヅ子・堀田 秀実・溝上 国男・光安 清幸
森 啓恵

平成24年度（久留米城下町遺跡第19次調査・白口経塚遺跡第8次調査・辻遺跡第6次調査）

秋吉 力・大淵 文子・鐘江 清・勝田美代子・蒲池 稔・合戸 喬一・小柳 秋男
塚本 明美・津留崎利子・中野 ゆみ・原口 貞子・細江チヅ子・森 啓恵・末安 茂喜
溝上 国男

Ⅱ．塚崎遺跡（第1次調査）

1．調査に至る経過

本調査の発端は、平成23年9月20日付で土地所有者より提出された、久留米市三潯町高三潯字塚崎西畑156-2ほかにおける「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会がなされたことである。これは寺院建設に伴うものである。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である塚崎遺跡の範囲内に含まれており、9月22日に試掘調査を実施した。その結果、遺構が地表面より55cm下のレベルで確認された。工事計画では新築建物の基礎は現況 G.L.から30cmの掘削に留める予定であり、保護層はやや薄くなるものの、遺跡自体は保護される状況であった。しかし、東側には江戸時代に銅剣2本が出土した御廟塚貝塚が位置しており、周辺での調査事例も少ないことから、遺構の分布状況を把握するため確認調査を実施した。

現地調査期間は、平成23年10月18日～同年10月28日である。なお、対象面積は327.18㎡で、そのうち調査面積は17㎡である。

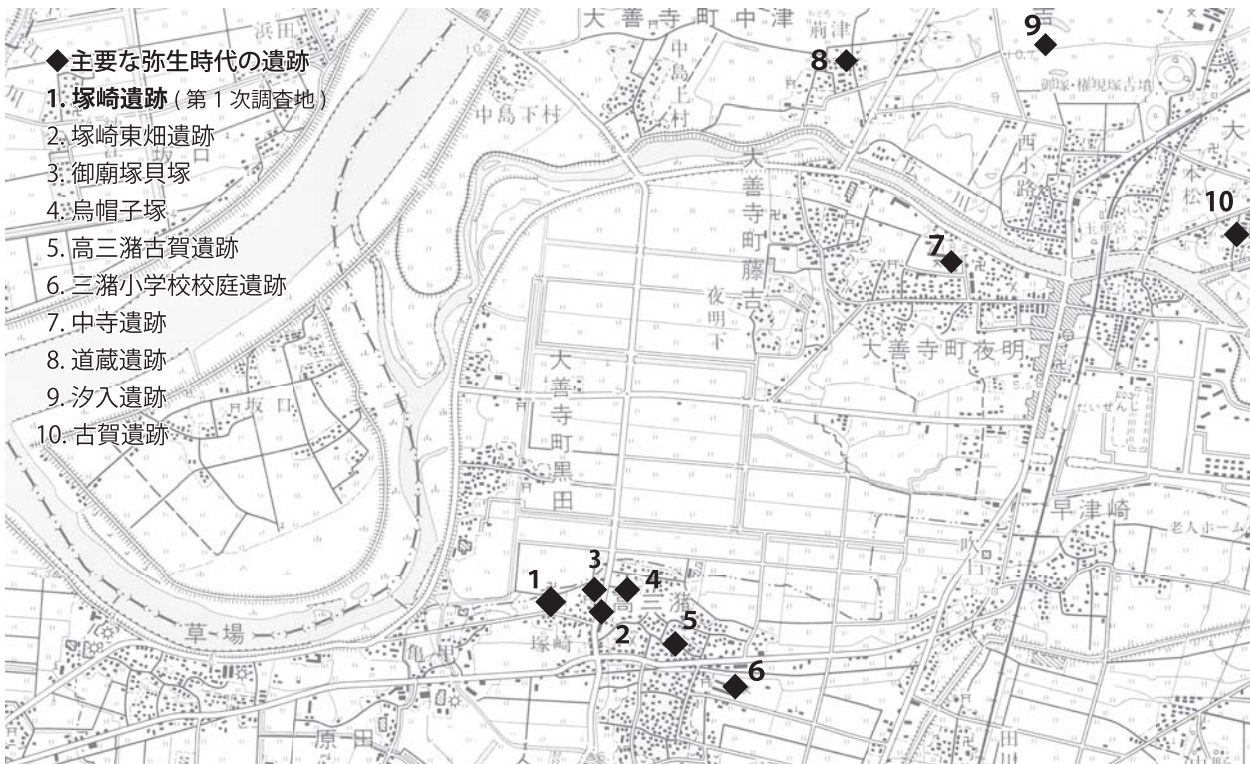
2．位置と環境

本調査地点は、広川左岸域に形成された標高約6mの低位段丘上に位置する。周囲の水田面から約2m前後小高くなっている。段丘状は前面に土器片などの遺物が散布し、段丘裾周りにも相当量の遺物片が落ちている。東に位置する御廟塚貝塚は、矢野一貞の『筑後将士軍談』に「高三潯村古塚」として紹介されている。そこでは弥生時代の箱式石棺と推測される棺外に、銅矛（銅剣）が副葬されていたことが記載されている。

また、近代の考古学界でも高三潯遺跡として知られていた。高三潯集落一帯で採集された弥生土器は、「高三潯式土器」と呼ばれ、弥生時代後期初頭～前葉にかけての標識土器型式となったことは有名である。また、弥生時代前期末～中期初頭を中心とする時期には、集落に小規模の貝塚を伴うことが知られ、後期には甕棺墓や箱式石棺墓などの墓地が形成されるようになる。因みに、集落域はより筑後川下流の南方へ移動したと考えられているが、竪穴住居の検出は高三潯地域が南限である。それより南で確認されるのは、掘立柱の建物のみである。

御廟塚貝塚の東側を南北に横断する県道大川～宮本線拡幅工事の際、1987・1989・1990年の三回にわたって福岡県教育委員会による発掘調査が実施された（章末註）。そこでは、弥生時代前期末～中期初頭の集落遺構（竪穴住居、貯蔵穴、土坑）、中期前半～中期後半の墓地（木棺墓、甕棺墓、土壙墓）などが確認されている。出土遺物も多く、弥生土器・石器のほか、農耕具である石鎌、漁撈具、家畜と思われる動物遺存体なども見られ、農耕に携わった漁撈的集落遺跡とされた。

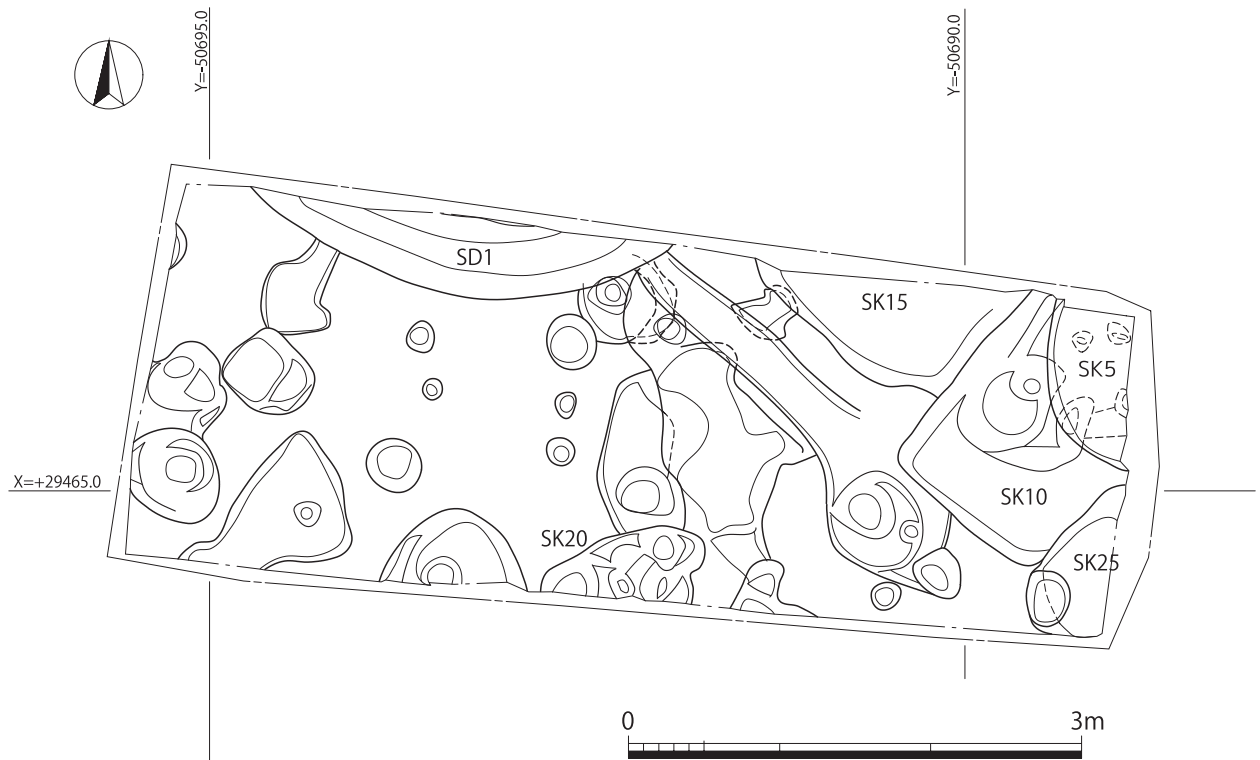
II. 塚崎遺跡 (第1次調査)



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)



第3図 調査区遺構配置図（1/50）

3. 調査の記録

（1）調査の経過

西に延びる舌状の低台地上に位置し、周辺の水田面よりも2mほど小高い。平安時代前期ころの創建を伝える天台宗の御船山妙覚院の境内であり、周辺一帯の地表面には、弥生土器やカキ殻が多数散布している。境内に茂る樹木類に影響を与えないように、対象地南端部の空閑地を選定し、ここに東西約7m、南北約2.5mのトレンチを設定した。

10月18日午後より重機で掘削を行い、19日には作業員を投入して壁削り作業、土嚢作成、遺構検出作業を行う。同日午後より遺構掘り下げ開始。25日には排水作業とともに遺構掘り下げを行い、座標移動を実施、26日は、SK15の遺物出土状況を実測、トータルステーションによる測量も開始する。全体写真撮影も実施。27日は埋め戻し作業、28日に機材撤収し、現地作業を終了した。

記録について記す。遺構写真はカラーリバーサル、モノクローム共に6×7版で撮影した。図面記録はトータルステーションにより三次元計測してデータを取得し、パソコン上で遺跡測量専用ソフトを用いて編集・図化している。また、遺物出土状況は水系メッシュ法による手測りで実測した。

（2）遺構の概要

現G.L.から-55cmで黄色粘土の地山面を検出した。それより上部は、包含層と表土で覆われているが、カキ殻は地表面に見られるのみで、包含層と遺構覆土中には認められなかった。遺構の中心は土坑と溝であるが、調査区南西側に見られる隅丸方形～楕円形プランのピットは、柱痕が認められるものがあつた。それらは掘立柱建物の柱穴となる可能性が高い。

SK5（第3図）

調査区北東角で検出した土坑である。平面プランは円形に近いと思われるが、大半が調査区外へ伸びるために規模も不明である。切り合い関係から、SK10より後出する。出土遺物に、弥生土器（甕・壺・蓋）、黒曜石剥片、円礫などがある。

SK10（第3図）

調査区東端部で検出した土坑である。調査区外へ伸びるために全体が検出できていないが、平面プランは隅丸長方形になるものと思われ、底はフラットではなく凹凸がある。規模は、長さ1.5m以上、幅約1.2m、深さ約37cmである。切り合い関係から、SK5に先行する。出土遺物に、弥生土器（甕・壺・器台）、石鏃、サヌカイト・黒曜石剥片、円礫、不明獣骨片などがある。

SK15（第3・6図）

調査区北辺東寄りで検出した土坑である。大半が調査区外へ出るため、深さ（約36cm）以外のプランや規模は不明とせざるを得ない。底面直上には、多くの弥生土器が同一面で検出された。弥生時代中期の完形個体を含む小壺4個などが含まれる。その他の出土遺物には、弥生土器（甕・壺・鉢）、サヌカイト・黒曜石剥片などがある。

SK20（第3・7図）

調査区南辺中央で検出した土坑である。大半が調査区外へ出るため、プランや規模は不明である。弥生時代中期の甕などが出土した。出土遺物に、弥生土器（甕・壺・鉢）などがある。

SK25（第3図）

調査区南東角で検出した土坑である。一角を検出したのみで、大半が調査区外へ伸びるため、プランや規模は不明である。ただ、底面までは比較的深く、深さ約58cmを測る。SK10との切り合いは判別できなかった。出土遺物に、弥生土器（甕・壺）などがある。

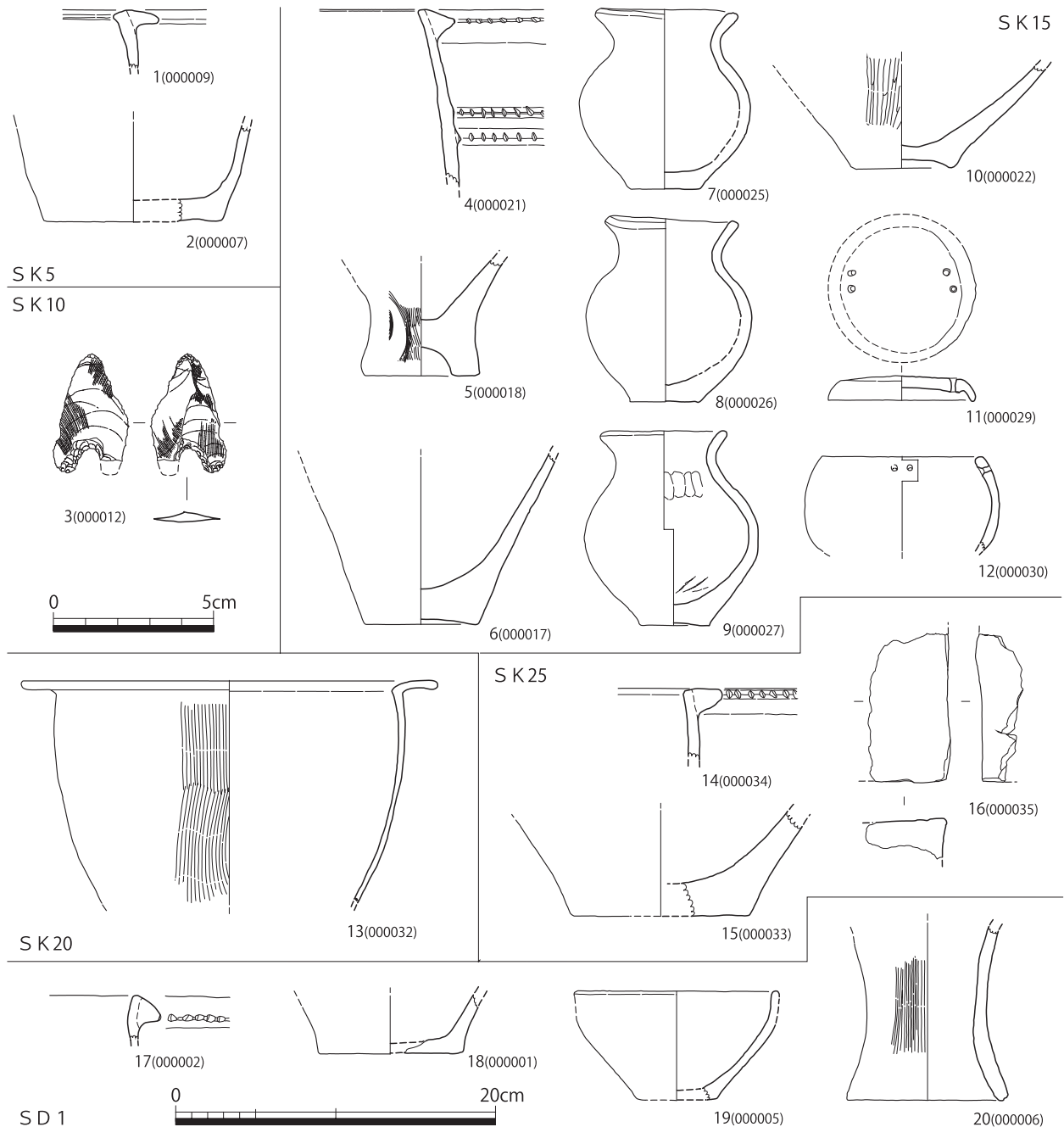
SD1（第3・8図）

調査区北辺西寄りで検出した溝である。大半が調査区外へ出るため、形状・規模共に推測になるが、溝幅約50cm、深さ約50cmで、断面形状は逆台形をなす。円形周溝状の遺構となるのではないだろうか。出土遺物に、弥生土器（甕・鉢・器台・壺）、黒曜石剥片などがある。

（3）遺物の概要

遺構中からは、弥生時代前期末～中期初頭を中心に、一部後期にかかるものも認められた。甕の口縁部の断面形状は、三角で刻目を持つものや鋤先状を呈するものが多い。壺は丹塗りを施したものも見られた。小片のため図示しなかったが、肩部に崩れた羽状文や連弧文を施すものが各1点ずつ見られた。遺物の総量は、パンコンテナ1箱分である。

1・2は、SK5出土である。1（000009）は、甕の口縁部片であるが、表面が剥離しており、調整は不明である。胎土には2mm大の礫や雲母を含み、焼成は良好である。2（000007）は、壺の底部片である。復元底径は約11.0cm。内底部はナデとオサエで整形し、外面はナデで調整する。胎土には角閃石の細粒が多く含まれ焼成は良好である。



第4図 出土遺物実測図 (1/4、3のみ1/2)

3 (000012) は、S K10出土の剥片鏃で、黒曜石製である。長さ3.7cm、幅1.95cm、厚さ0.3cmを測る。基部を一部欠損している。

4～12はS K15出土の弥生土器である。4 (000021) は、甕の口縁部片で、口径は40cm前後となるだろう。口縁部にかけてやや内湾し、三角口縁と口縁部下の低い二重突帯には刻目を施す。胎土には3mm大の礫を若干含むが、焼成は良好である。5 (000018) は、甕の底部で強い上げ底となっている。底部径は7.4cmを測る。外面は縦ハケで調整、内面はナデ、内・外底部はオサエで仕上げる。胎土には2mmの礫を含むが、焼成は良好である。6 (000017) は、甕の底部である。底径は7.2

cmで、外面は縦ハケ、外底部は横ナデで仕上げる。胎土には2mm大の礫を多量に含み、雲母も若干混入している。7 (000025) は完形の小壺である。口径8.9cm、器高11.3cm、底径4.35cmを測る。内外面共にナデ仕上げ（外面は一部ミガキか？）で、内底部にはコテ当て痕がある。胎土には、金雲母が多く、2mm大の礫も含む。形状や法量、調整、胎土などが次の8・9と酷似しており、同一人物によるあまり前後しない時期の製作であったと推察する。これら3個体の法量自体には、若干のバラツキが見られるものの、底径は全く同じ数値を示し、底部の厚みもほぼ揃っていることから、底部が同一規格として製作する際の基準となっていたことをうかがわせる。8 (000026) は、口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形の小壺である。口径8.3cm、器高11.6cm、底径4.3cmを測る。9 (000027) は、二つに割れ、胴部の一部を欠損するものの、完形に近い小壺である。口径7.95cm、器高12.15cm、底径4.3cmを測る。10 (000022) は、壺の底部である。底径は6.5cmを測る。外面は縦ミガキ、内面はナデ調整する。胎土には3mm大の礫と微量の雲母を含む。11 (000029) は平たい形状の蓋の破片である。紐通しの穴が2つセットで外周に2ヶ所外面から穿けられている。復元口径9.2cm、天井径は7.5cm、器高1.55cmを測る。胎土には1mm大の礫と金雲母を微量含む。その法量から、7～9の小壺もしくは、後述する12の鉢とセットになる可能性がある。12 (000030) は口縁部が内傾する鉢の口縁部片である。法量は口径8～10cmほどであり、内外面をナデで調整する。胎土には2mm大以下の礫を大量に含み、金雲母若干を混入する。口縁部下には、2つセットで外面から穿孔する小穴が、対面する位置2ヶ所に復元できる。

13 (000032) は、S K 20から出土した弥生土器の甕の口縁部片である。復元口径は26cmほどとなる。口縁部はL字形に折れ、外面は縦ハケ、内面はナデ調整する。胎土には2mm大以下の礫を含み、角閃石若干が混じる。焼成も良好で、内外面とも概ね橙色を呈する。

14～16はS K 25出土の弥生土器である。14 (000034) は甕の口縁部片で、分厚くなった三角口縁端部に刻目を施す。口径は40cm前後で、胎土には1mm大の礫と金雲母を多量に含む。15 (000033) は、壺の底部片である。復元底径は約11.0cmである。外面はナデ調整（一部ミガキか）、内面はナデを施す。胎土には1mm大の礫を多量に含み、金雲母も混入する。16 (000035) は、支脚の一部と思われる土製品片である。柱状にナデ調整されているが、二次被熱のためか多くヒビが入り脆くなっている。胎土には3mm大以下の礫を多量に含んでいる。

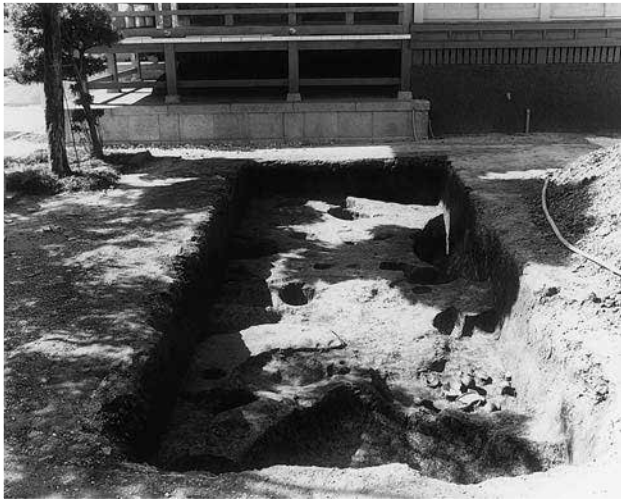
17～20はS D 1出土の弥生土器である。17 (000002) は、三角口縁を呈する甕である。刻目を施し、胎土には1mm大の礫、や微量の角閃石・雲母を含む。18 (000001) は甕の平底片である。復元底径は約9cm、外面は縦ハケ、内面はナデで調整する。内底部の欠損部は、外面からの穿孔の可能性がある。胎土には2mm大の礫を含み、金雲母と角閃石が微量であるが混入する。19 (000005) は、鉢片である。表面は荒れており、調整は不明瞭である。復元口径は12.8cm、底径は5.0cm、器高は6.8cmを測る。20 (000006) は器台片である。底径10.1cmで、外面は縦ハケ、内面はナデ調整する。胎土には3mm大以下の礫を含む。

4. 総 括

地山面から弥生時代前期末～中期前半の土坑4基や後期の溝（円形周溝か？）1条、時期不明のピット（掘立柱建物柱穴の可能性ある）を検出した。今回は調査範囲の制約が多く、調査面積が狭いため、集落の広がりや時期的変遷については捉えることができなかったが、高三潴の低位段丘上には、良好な状態で遺跡が残存していることが判明した。今後、周辺での発掘調査の進展が期待される。

（小澤）

註）福岡県教育委員会編 1997『塚崎東畑遺跡』福岡県文化財調査報告書第127集



第5図 調査区全景（東から）



第6図 SK15遺物出土状況（南西から）

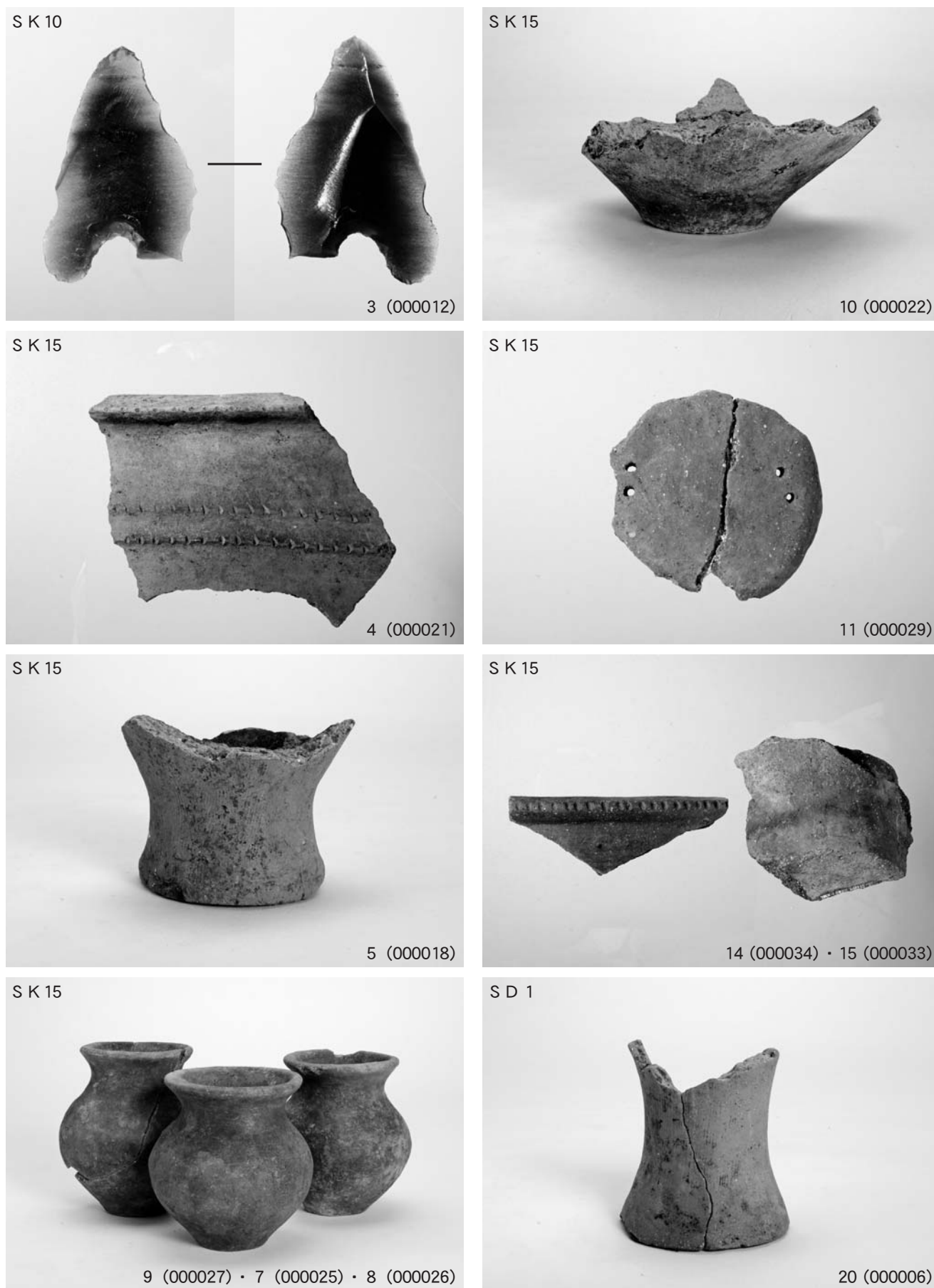


第7図 SK20遺物出土状況（南から）



第8図 SD1全景（南から）

II. 塚崎遺跡 (第1次調査)



第9図 出土遺物写真

Ⅲ. 西海道跡（第3次調査）

1. 調査に至る経過

本調査の発端は、平成23年9月20日付で久留米市土地開発公社より提出された、久留米市荒木町荒木字井手口24-Iほかにおける「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会がなされたことである（23開事第7号-11月1日受理23文財第1-180号）。これは藤光産業団地造成に伴うものである。当該地東端部は、周知の埋蔵文化財包蔵地である律令官道・西海道の推定路線上に位置している。

対象地は、ミルクプラント跡地であり、昭和40年代頃に水田に盛り土して工場が建設されていた。今回の工事目的は工業団地造成で、現況 G.L. から更に盛り土される計画であることから、遺跡自体の保護は十分可能であると判断した。このため、西海道の遺構の存在が推定される対象地東端部で、遺構の残存状況等を把握するための確認調査を実施することとした。

現地調査は、平成23年11月16日～同年11月24日に実施した。なお、対象面積は18,000㎡で、そのうち調査面積は52㎡である。

2. 位置と環境

本調査地点は、野添川の旧河道にあたる標高約14mの地点に位置する。同地点は、木下良氏による歴史地理学上の成果から推定される西海道路線と交差する場所である。1970年代後半、同氏は久留米・筑後市域に分布する「車路」「車地」計6ヶ所が一線上に辿ることができることを指摘した。その多くは大字界に接し、それを繋ぐと2ヶ所で方向を変える折れ線となっていることに気づいた。更に空中写真の判読結果や現地踏査によって、律令官道・西海道路線を復元したのである。

また、'90年代以降、久留米市内や筑後市内でも推定路線上で発掘調査が行われ、道路遺構が相次いで確認された。これらは路面幅が9m前後で両側に側溝を伴うなど、規模や造営工法上の共通点が多い。久留米市内の調査事例では、西海道跡第1次調査（諏訪野町字上牟田）、同第2次調査（荒木町荒木字東）、車地遺跡第3次調査（藤光町字車地）、古賀前遺跡第4・10・13次調査（藤光町字古賀前）を挙げることができる。これらの調査は、木下氏の推定が正しかったことを裏付けた。

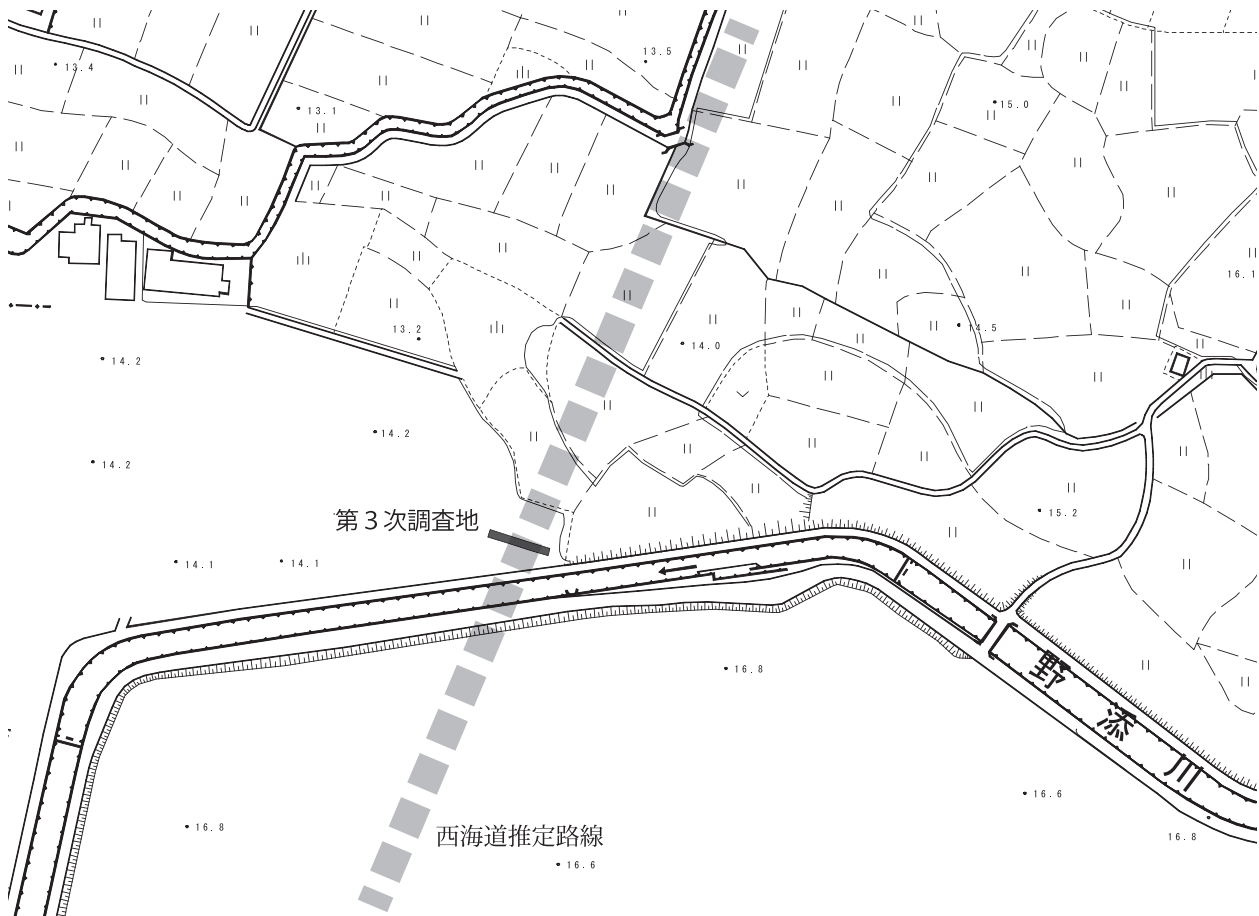
北方に位置する車地遺跡や古賀前遺跡の例では、台地上をオープンカットし構築した可能性が考えられている。その造成面に両側溝を掘削するが、それに挟まれた当初の路面幅は9mである。しかし、側溝には掘り直しの痕跡が認められ、改修のたびに路面幅は9mから8m、5mと縮小していく傾向がある。存続時期は8世紀代～11世紀代と考えられている。

なお、調査地の北方約1.3kmの地点には藤光町字車地が、南方約300mの地点は荒木町荒木字車路および坂ノ上という古代官道に関する地名が存在する。

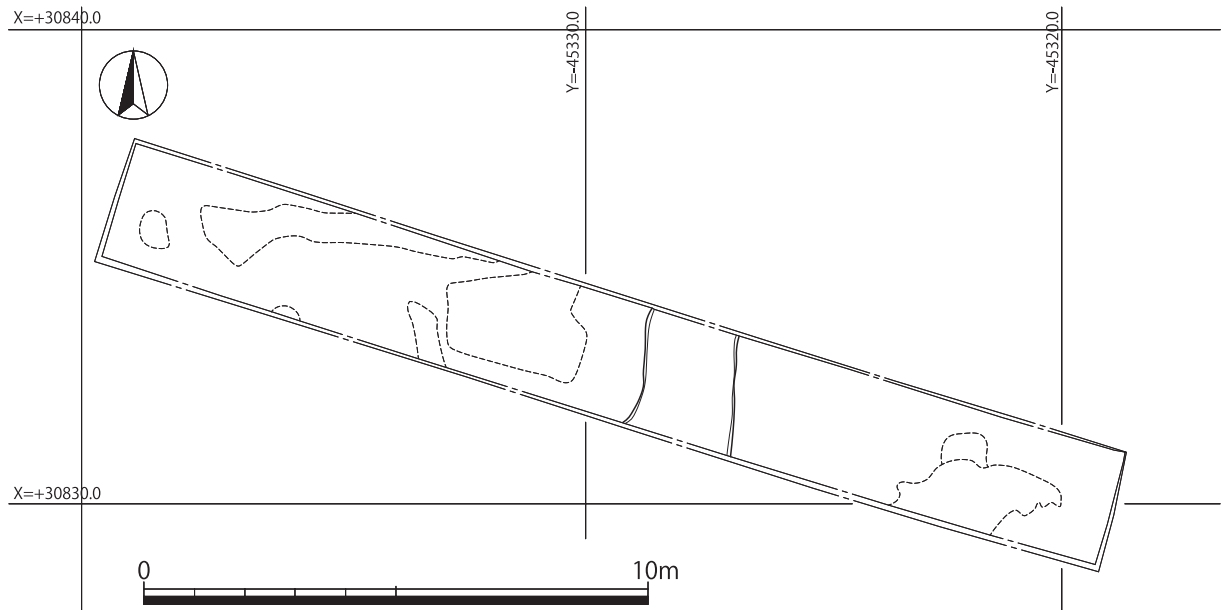
Ⅲ. 西海道跡（第3次調査）



第10図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第11図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



第12図 調査区遺構配置図（1/150）

3. 調査の記録

（1）調査の経過

対象地南側には野添川が西流するが、かつては対象地東端部で流れを北西側にとり、西海道推定路線と交差していたと思われる。今回の調査では、この谷部と西海道推定路線が交差する地点に、幅2.5m、長さ20mの東西トレンチを設定、関連遺構が検出されれば調査区を拡張する方針で、確認調査を開始した。

11月16日に重機で掘削を行い、17日には壁削り作業後、遺構検出を開始。トレンチ中央付近に浅い窪みを検出。これが谷部西岸と思われる。また東端付近底部は不定形の凹凸がみられ、ここからは湧水した。おそらく旧河川の水流による地形であろう。現代の土坑・溝状の窪みを掘り下げ、トータルステーションによる測量作業、写真撮影作業などを実施する。翌18日は降雨により作業中止、周が明けた21日に排水作業。22日は排水作業と並行しながら埋め戻し、24日に撤収作業を行い、現地作業を終了した。

記録について記す。遺構写真はカラーリバーサル、モノクローム共に6×7版で撮影した。図面記録はトータルステーションにより三次元計測してデータを取得し、パソコン上で遺跡測量専用ソフトを用いて編集・図化している。

（2）遺構の概要

推定路線と交差するトレンチ南壁面東端部の土層では、現G.L.から①造成土上層（70cm）、②造成土下層（50cm）、③耕作土（25cm）の順で地山（黄褐色砂礫層、鉄分沈着）に達した。①層は黄褐色土に灰白色粘土ブロック・緑灰色粘土ブロック、灰色粘土ブロック、小礫などが混じり合う。②層はくすんだ黄褐色土に灰褐色砂質土、円礫、灰褐色シルトブロックが混じり合う。③層は、暗

灰色土で小礫が多量に含まれる。

遺構は見られず、造成に伴うと見られる土坑状の窪みや溝のみである。

（3）遺物の概要

現代以前に遡る出土遺物は皆無に近く、造成土中からローリングが著しい土師器の取手片と、砂礫層上面から中世頃の土師器片が出土したのみである。

4．総 括

対象地では、西海道の遺構は確認することができなかった。これは、旧河道の砂礫層直上が小礫混じりの耕作土となっていることから勘案すると、調査地点付近が古くに地下げ、もしくは河川的作用によって関連遺構が流失した可能性が考えられる。その時期については、砂礫層上面の中世後期のものと思われる土師器片から、近世以前に遡る可能性もあるだろう。（小澤）



第13図 調査区全景（東から）



第14図 調査区全景（西から）



第15図 調査区北壁土層（南西から）



第16図 調査区南壁土層（北西から）

IV. 善導寺境内遺跡（第10次調査）

1. 調査に至る経過

本調査の発端は、平成23年7月22日付で土地所有者より提出された、久留米市善導寺町飯田550における「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会がなされたことである（9月13日受理第1-180号）。これは防火用貯水槽及びポンプ舎建設に伴うものである。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である善導寺境内遺跡に含まれる。

工事箇所は、浄土宗大本山・終南山光明院善導寺が立地する低台地の北端部に位置する。周辺地形や境内でのこれまでの調査成果から、遺構の存在が希薄であることが想定され、開発面積も小規模であることから、確認調査を実施することとした。

現地調査は、平成24年3月19日に実施し、同日終了した。なお、対象面積は126㎡で、そのうち調査面積は23㎡である。

2. 位置と環境

本遺跡が所在する善導寺町は、筑後川とその支流巨瀬川が合流する地点にあたる。善導寺境内遺跡は、筑後川左岸に形成された標高11～13mの自然堤防上に位置する。

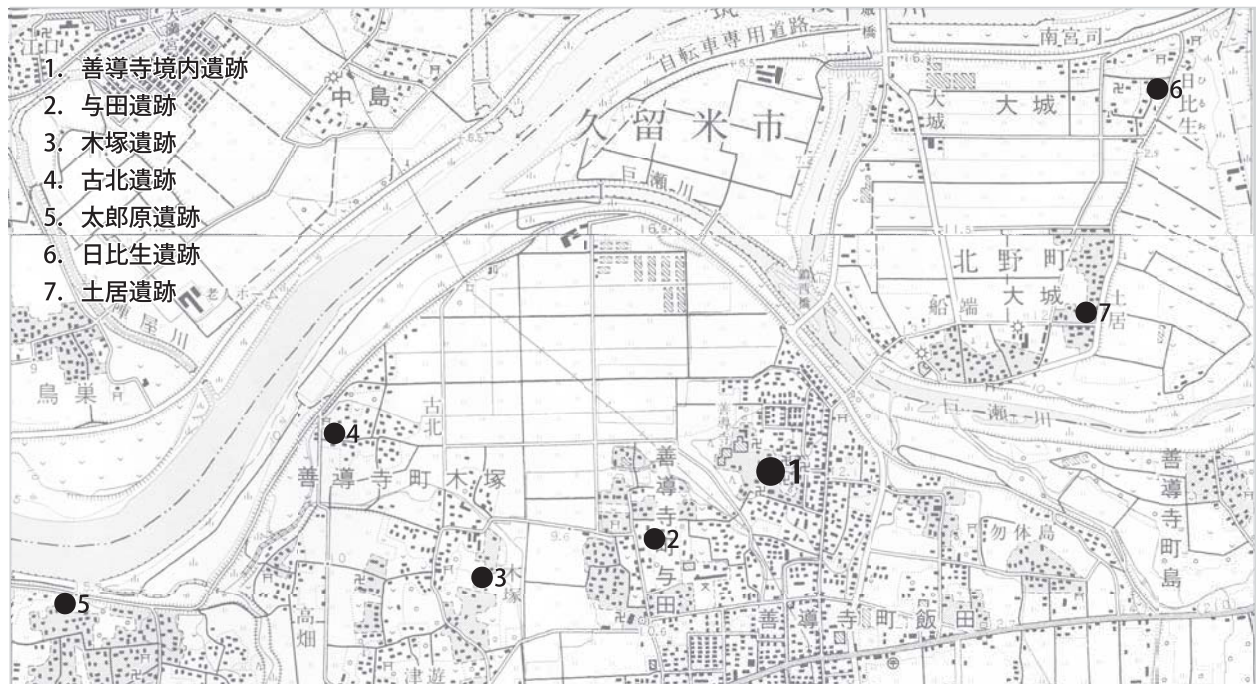
周辺の微高地上には縄文時代以来の遺跡が点在する。木塚遺跡では、過去5回の調査で縄文前期の轟式・曾畑式土器、晩期の土器や石器が出土しているが、現段階では遺構が確認されていない。

弥生時代では、木塚古墳の下層から前期板付Ⅱ式の小壺が副葬された土壙墓や木棺墓・石棺墓が発見されている。また、筑後川旧河道を挟んで対岸の北東約1.8mの地点に位置する日比生遺跡は、銅矛の出土が伝えられている（九州歴史資料館蔵）。現筑後川流路の対岸一帯では、朝鮮系無文土器の牛角状把手などが出土した仁王丸遺跡などの集落遺跡をはじめ、塚島遺跡、大城中筒井遺跡などで支石墓や甕棺墓・石棺墓が多数発見されている。本遺跡でも第5・6次調査で、中期の甕棺墓6基、石棺墓2基、石蓋土壙墓1基が検出される。付近では丹塗土器も多数出土していることから、墓地に伴う祭祀遺構の存在も想定される。

古墳時代には、数は少ないながら自然堤防上にも古墳が築造される。木塚古墳は初期横穴式石室を有する前方部がやや短い前方後円墳である。墳丘盛り土は後世の土取りで消滅しているものの、墳長は約48mで5世紀後半の築造とされる。対岸には、後期に属する塚島古墳がある。大きく破損しているが、複室構造横穴式石室を有し、塚島天満宮境内に現存する。この他にも、自然堤防上には小規模な円墳が存在したが、現在は消滅してその姿を見ることはできない。

鎌倉時代には、平安時代末肥前国高木から土着した草野氏の一族で、平家討伐の論功行賞によって在筑後国国司・押領使両職を勤めた草野永平が国人として勢力を伸ばしていた。彼は積極的に寺

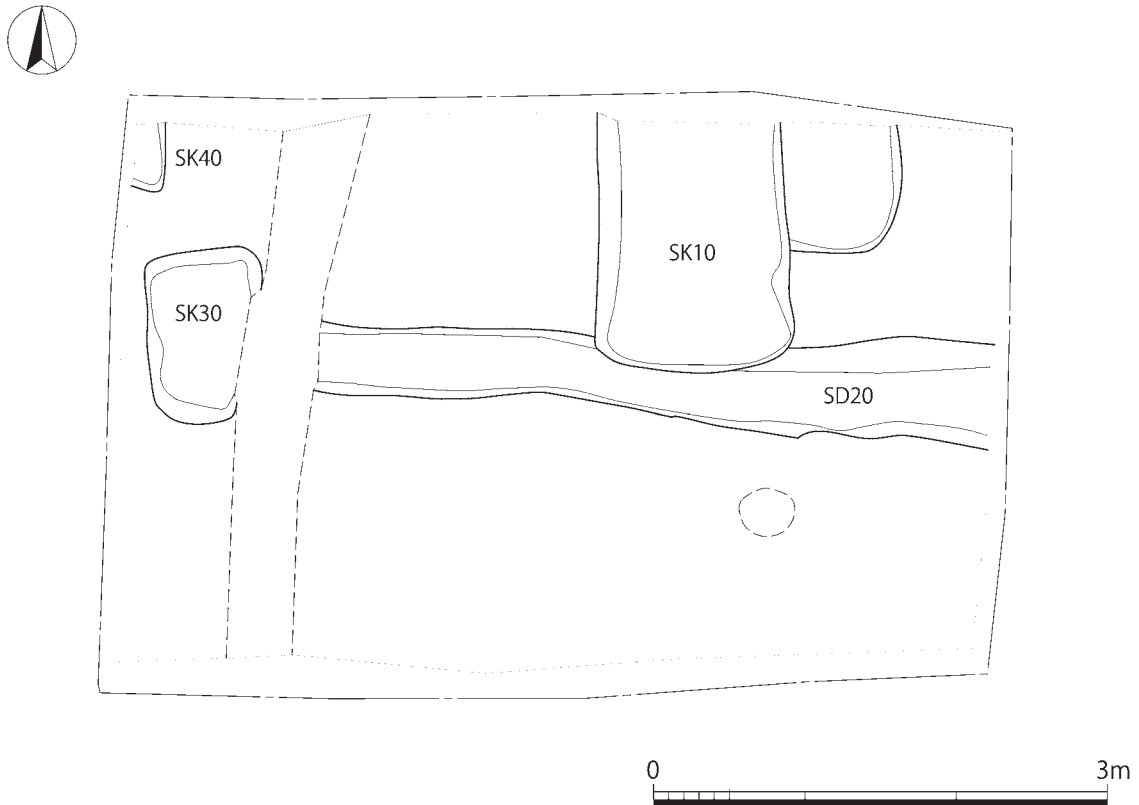
IV. 善導寺境内遺跡（第10次調査）



第17図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第18図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



第19図 調査区遺構配置図（1/50）

社を保護し、この浄土宗大本山善導寺の開創の際も大壇越となった（永種説もある）。この時には、浄土宗開祖法然上人の後継者である二世の弁長（鎮西上人・聖光上人）が招かれ、承元二年（1208）に創建された。建保五年に順徳天皇から勅額を賜り、元徳二年には後醍醐天皇の勅願所となるなど寺勢もあがっていった。しかし、南北朝や戦国時代にはたびたび兵火にあい、伽藍を失うなどの盛衰を経ながらも、今日まで広大な寺地と多数の歴史的建造物、大楠や菩提樹などの天然記念物、各種美術工芸品などが伝わっている。

3. 調査の記録

（1）調査の経過

対象地は、善導寺本堂の北西側約30m地点にあたる。巨瀬川に面した低台地の北西端部に位置する。樹木に囲まれた南北14m×東西9mの防火用貯水槽及びポンプ舎建設範囲南半部に、南北約4m、東西約6mのトレンチを設定し、北側を排土置き場とした。

記録について記す。遺構写真はカラーリバーサル、モノクローム共に6×7版で撮影した。図面記録はトータルステーションにより三次元計測してデータを取得し、パソコン上で遺跡測量専用ソフトを用いて編集・図化している。

（2）遺構の概要

南側土層では、現 G.L.から表土（16cm）、茶灰色土（5cm）、黄茶褐色土（20cm）、暗茶灰色土（20cm）の順で地山（ややくすむ黄褐色土）に達する。この面から、中世頃と思われる溝1条、土坑3基などを検出した。しかし遺構密度は低く、かついずれの遺構も浅い。

S K 10（第19図）

調査区北壁付近で検出した隅丸長方形プランの土坑である。調査区外へ延びるために規模は不明であるが、南北長1.7m以上、東西幅約1.2m、深さ約14cmである。底面はフラットである。切り合い関係から、S D 20より後出する。覆土中から、糸切り底の土師器小皿小片が出土している。

S K 30（第19図）

調査区西端部で検出した隅丸方形プランの土坑である。一部現代の攪乱のため、確認できなかったが、南北長約1.15m、幅約80cm、深さ約13cmを測る。遺物は出土しない。

S D 20（第19図）

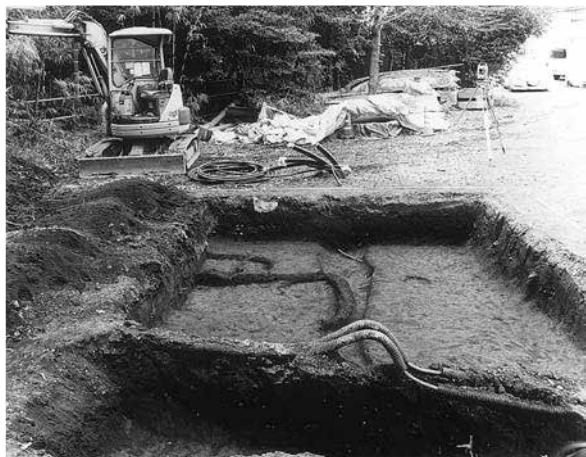
調査区中央部を東西に縦断する溝である。長さ4.5m分を検出した。西端部は攪乱により不明で、東端部は調査区外へ延びる。幅は40～70cm、深さは約14cmである。切り合い関係から、S K 10に先行する。出土遺物はない。

（3）遺物の概要

S K 10覆土中から土師器片、S K 40から青磁細片が出土したに過ぎない。

4. 総 括

調査地は善導寺本堂の裏手にあたり、巨瀬川の氾濫原に面する低位段丘端部に位置する。これより北側は段丘崖となっており、急激に標高を下げる。このような状況であるためか、遺構密度は低く、かつ深さも浅く残りは極めて悪い。情報量も極めて少ないが、これらの遺構は、S K 10からの出土遺物により、中世頃の年代が考えられるのみである。（小澤）



第20図 調査区全景（西から）



第21図 調査区土層（北から）

V. 久留米城下町遺跡（第19次調査）

1. 調査に至る経過

本調査は平成24年4月12日付で、土地所有者より久留米市中央町15-3、15-4、15-5における、倉庫建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに端を発する。調査地は周知の遺跡である久留米城下町遺跡の範囲内に含まれ、調査地を含む周辺は近世城下町の一角、築島町と新道に位置している。今回の開発では築島町と新道との境界線上に計画建物が建設されることから、この屋敷境の確認を主目的とした確認調査を実施することとした。代理人との協議の結果、建物建設予定地の約36㎡について調査の対象とし、4月19日より調査に入る運びとなった。

2. 位置と環境

阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川である筑後川は、久留米市街地の北西付近で流路を大きく南西へと転じ、大きな蛇行を繰り返しながら有明海へと注ぐ。西流する筑後川が大きく流を変え流を南北へと変える左岸地点に近世城郭久留米城が立地する。現在の久留米城下は、元和7年に有馬氏が筑後北半国の領主として入国以降に形成されたものである。有馬氏以前の毛利・田中時代の町割りを大幅に改変し、寛永年間に基本的な町割りが完成したものである。以後、城下町は拡大を続けながら明治時代を迎える。



第22図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第23図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

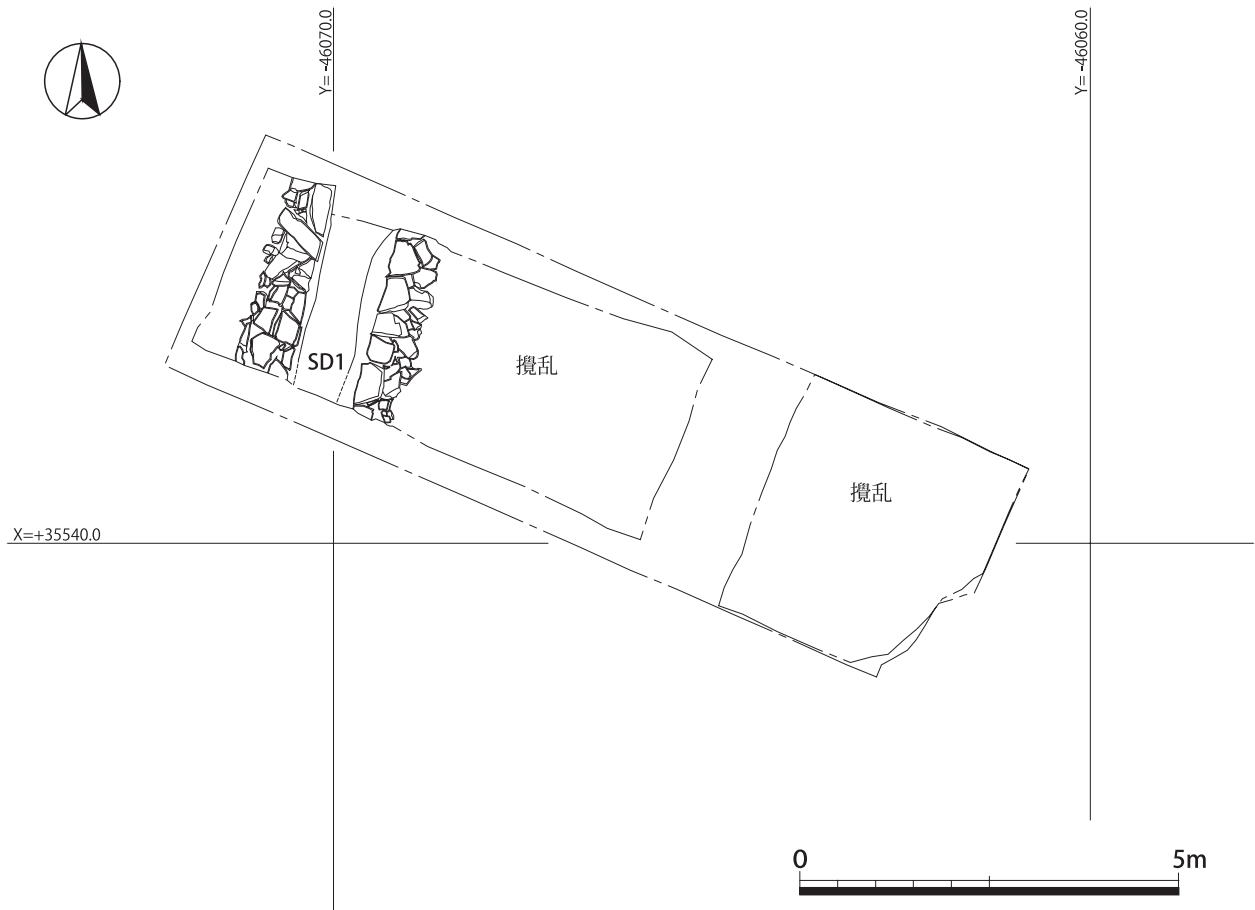
今回の調査地は、この久留米城下町の南部に位置する町屋「築島町」「新町」にまたがり、標高約8mを測る。周辺には、北に久留米城の外堀を望み、西に武家屋敷である京隈侍屋敷、東に「亀屋町」・「今町」などの町人街が広がる。

近世以前の遺構は、上記のように久留米城下造成の為、大規模な地形の改変がなされており不明な点が多い、甕棺墓を検出した京隈侍屋敷遺跡第6次調査、弥生時代の明善高校校庭遺跡や速水遺跡等、弥生時代の遺跡が広範囲に認められる。また古墳後期の石障系装飾古墳である日輪寺古墳が調査地より西600m地点に位置している。このように城下町形成による破壊を免れた遺構が散見されるため、本丘陵上には元来弥生時代から、かなりの数の遺構が存在していたと推測される。

3. 調査の記録

（1）調査の経過

平成24年4月19日、現況が駐車場であったため、カッターによるアスファルトの除去を行う。その後、重機による表土剥ぎを開始する。調査対象地は後世の攪乱が著しく、遺構の検出は困難かと思われたが、調査区西端より石組みの溝を1条検出した。しかしながら、溝以外については、攪乱を受けているため遺構は検出されなかった。重機による遺構の検出後、人力によって石組溝の検出を行い、20日に写真撮影と測量を行い、その後埋め戻しを行う。土日を挟んだ23日に機材の撤収し調査を終了する。遺構の測量はトータルステーションを用いて作成し、測量データは株式会社CUBIC社製ソフト「遺構くんCubic」にて編集・保存している。また記録写真はモノクローム・カ



第24図 調査区遺構配置図 (1/100)

ラーリバーサルとも6×7判で撮影した。

（2）遺構の概要

調査区西端に南北方向に延びる石組溝を1条検出した。その他の部分については近代以降の攪乱が著しく遺構の検出には至っていない。

SD1（第24・26～32図）

調査区西端を南北に延びる石組溝である。石組は東西伴に片岩を用いて組まれており、幅97cm、深さ87cmを測り、石組に使用された片岩は久留米城下に散見される石組溝に通有の石材である。石組は6～7段が遺存しており上部構造は不明である。遺構の検出時には東西の石組間より片岩製の石材が一行に並んだ状況で検出されており、溝埋没後に境界が狭められていた状況が伺える。この石列下の埋土からはガラス等が出土しており、明治以降に石列は築かれたと考えられる。溝の埋土は焼土や片岩を含む層が約40cm堆積し、その下に黒色土が約20cm、最下層に暗褐色土が堆積している。最下層出土遺物と裏込土出土遺物からこの石組は18世紀末から19世紀中頃にかけて構築されたと考えられる。

（3）遺物の概要

SD1埋土および裏込めから陶磁器類が少量出土している。1・2は波佐見焼の五寸皿で2重の

格子文が描かれる。3は碗蓋、4は土瓶片でありいずれもSD1下層埋土より出土する。6はくらわんか碗、7は端反碗、8は大型瓶の破片である。5～8は石組裏込より出土する。なお、詳細については、遺物観察表を参照とされたい。

4. 総 括

今回の調査は、町境の検出を主目的とした確認調査である。天保年間図（以下天保図）によると調査対象地は、新道と築島町との境界地となっており、町境の確認が期待された。前述のとおり、今回の調査で検出した石組溝SD1がこの境界溝と考えられ、天保図にある築島町と新道の境界線に比定される。この両町の間は道路として描かれているため、SD1は道路東側の側溝であろう。

天保図による新道は、「築島新町」を指すと思われ、大手門前に南北に広がる町で、東は「築島町」に面し、南は不動社を経て「今町」西端に通じる。築島町は、大手門前に位置する町で北を「亀屋町」、東を「魚屋町」、南を「今町」に限られる町並みを有する。築島町の由来は有馬氏の城下町造成時に低湿地土を盛り上げて出来たことに由来し、「延宝絵図」に町名が見受けられる。一方築島新町あるいは新道について「延宝絵図」には記述が無く、築島町の西は空白地となっている。築島新町の成立時期については定かでないが、享保11年（1726）に起きた久留米大火、いわゆる「田代火事」と翌年の町屋の再編成に契機がある可能性が高い。田代火事は久留米城内（外郭）田代家より出火し久留米城下の大半を焼失させた火事で、元禄9年（1696）の白石火事と共に久留米の大火としては最大級のものであった。この火災を受け、池町は馬場に両替町筋の北側は広手となり、これらの地域に住んでいた町人は原古賀町等へ転居したとされている。このような町屋再編の一環として築島新町も成立したと考えるがその成立時期については不明な点が多い。SD1については、裏込めから出土した陶磁器に18世紀半ばから遡る遺物は確認されておらず、石組自体の築造時期は田代火事の時期よりも若干新しいといえよう。（熊代）

第2表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台内 印銘等	特徴	製作地・胎土	年代・備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
1 第31図	SD1 下層	磁器	皿	12.0	4.1	3.2	染付		2重格子	2重圏線	蛇の目軸刺ぎ		波佐見	18c後半～19c	201203 -000008
2 第31図	SD1 下層	磁器	皿	(12.0)	4.2	3.5	染付		2重格子	2重圏線	蛇の目軸刺ぎ		波佐見	18c後半～19c	201203 -000009
3 第31図	SD1 下層	磁器	碗蓋	—	—	2.7	染付	笹	草・四方棒				肥前	18c後半	201203 -000006
4 第31図	SD1 下層	陶器	土瓶	—	—	(4.5)	鉄釉							19c	201203 -000010
5 第32図	SD1 東裏込	陶器	皿	(11.0)	—	2.3	灰釉							18c後半～19c	201203 -000005
6 第32図	SD1 東裏込	磁器	くらわんか碗	—	3.8	(3.5)	染付	草花		圏線・五弁花		五弁花はコン ニャク印判	波佐見	18c後半	201203 -000001
7 第32図	SD1 東裏込	磁器	端反碗	—	—	(3.9)	染付	草花	火焰				肥前	19c前半	201203 -000002
8 第32図	SD1 東裏込	磁器	瓶	—	—	(10.1)	染付	松竹梅・岩					肥前	19c	201203 -000004



第25図 調査区全景（東から）



第26図 SD 1 上面検出状況（南から）



第27図 SD 1 完掘状況（南から）



第28図 SD 1 完掘状況（北東から）



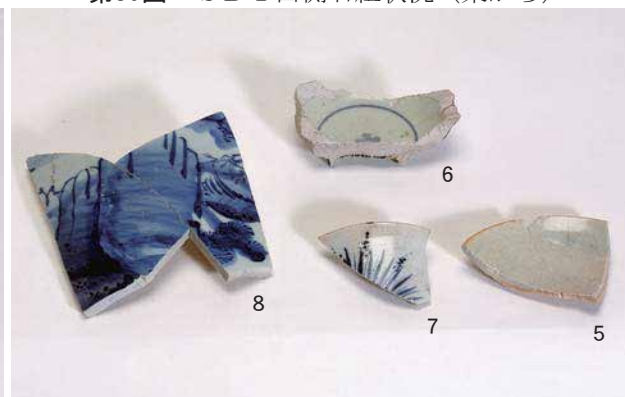
第29図 SD 1 土層堆積状況（南から）



第30図 SD 1 西側石組状況（東から）



第31図 SD 1 出土遺物



第32図 SD 1 裏込出土遺物

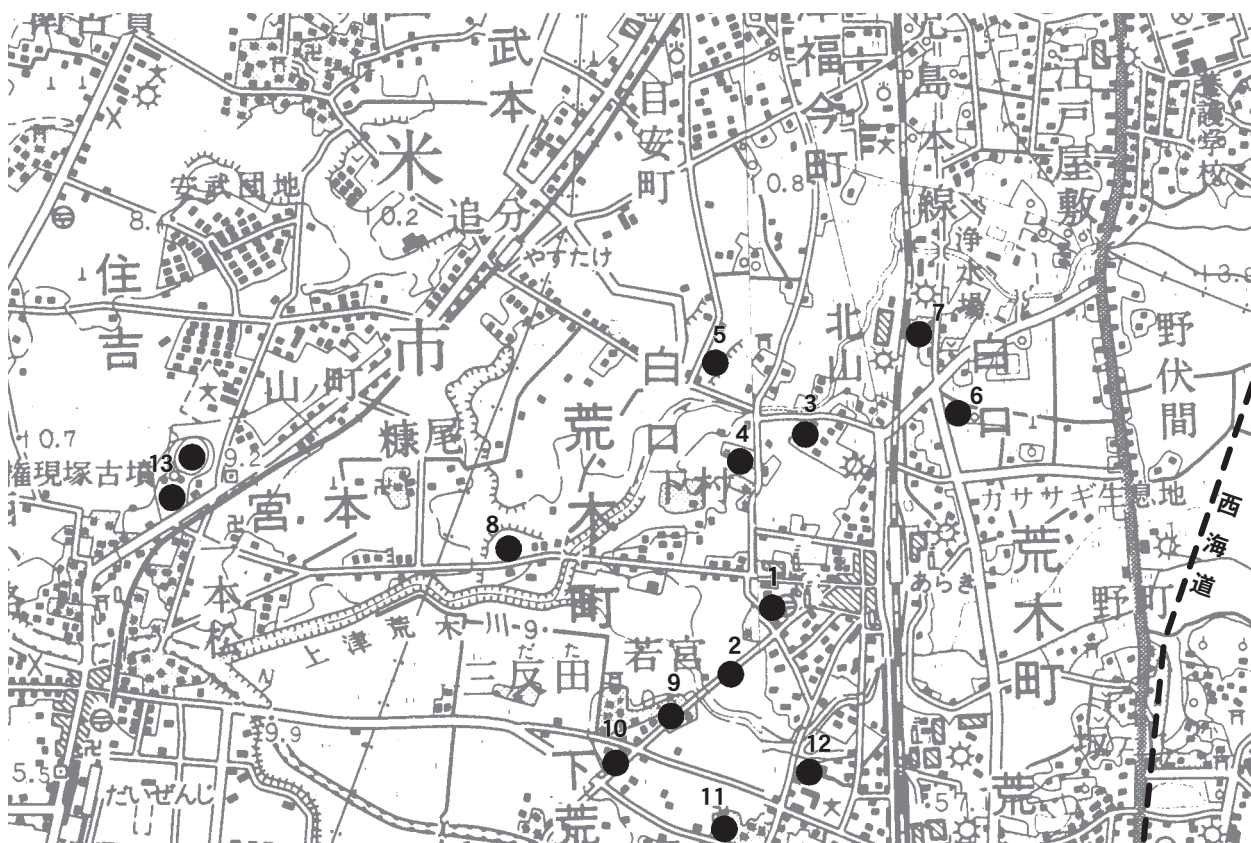
VI. 白口経塚遺跡（第8次調査）

1. 調査に至る経過

本調査は平成24年4月9日付で、土地所有者より久留米市荒木白口2361-12、2351-5における、専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに端を発する。調査地は周知の遺跡である白口経塚遺跡の範囲内に含まれ、古墳時代から中世にかけての遺構が存在している可能性が高いため、同年5月24日発掘調査が必要である旨回答した。同日土地所有者から発掘調査の依頼が提出された。これを受けて翌5月25日より発掘調査を開始した。

2. 位置と環境

筑後川の左岸に連なる耳納連山から派生した低台地の末端付近に位置し、標高は9.5mを測る。本調査区から西350mにはJR荒木駅がある。周辺には、弥生時代から生活の痕跡が見られる。鬼



1. 白口経塚遺跡(本調査区) 2. 西ノ原遺跡 3. 白口西屋敷遺跡 4. 白口中村遺跡 5. 向定覚遺跡
6. 源右衛門城戸遺跡 7. 北山古墳群 8. 筒川遺跡 9. 宮原遺跡 10. 鬼木遺跡 11. 寺脇遺跡
12. 二子塚遺跡・二子塚古墳 13. 御塚・権現塚古墳 ※破線は古代西海道跡

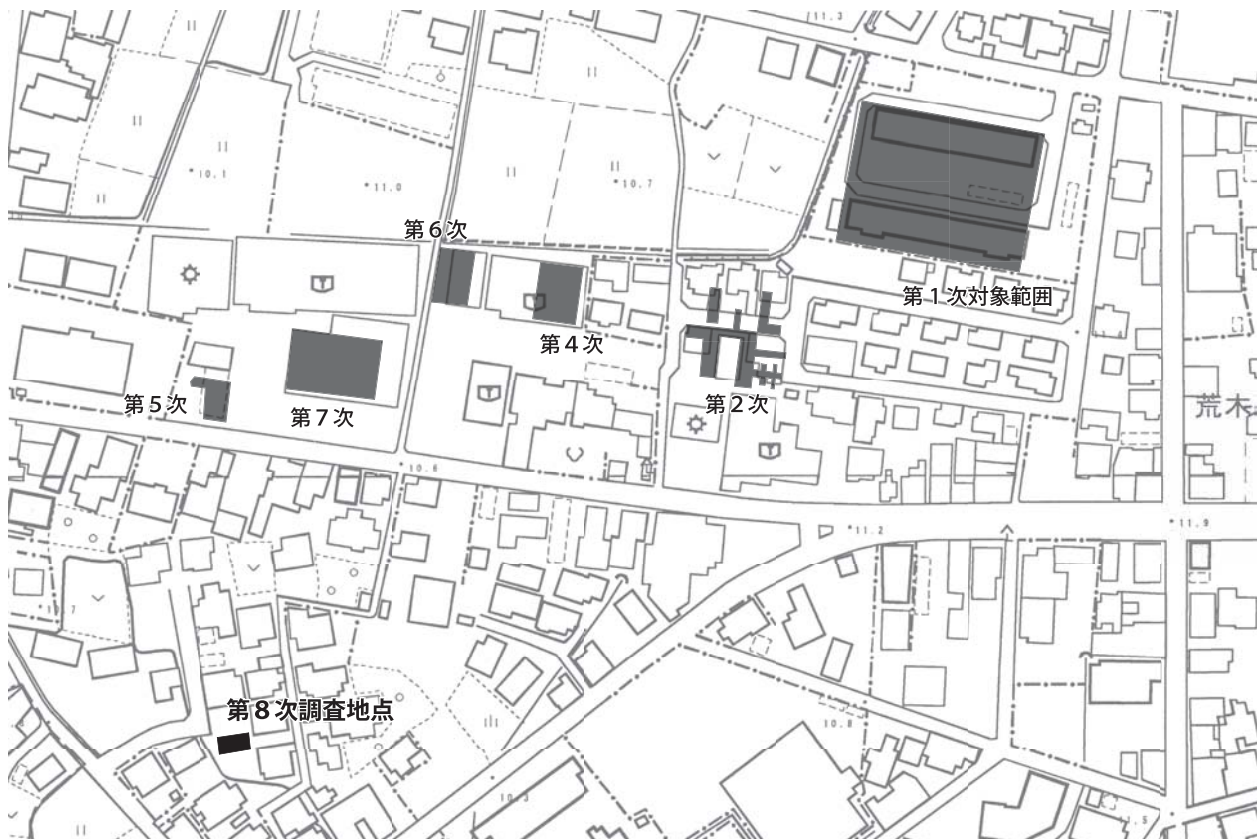
第33図 調査地点と周辺の遺跡分布図

木遺跡では、弥生時代後期の環濠や、広形銅矛などが発見されている。他に宮原遺跡、寺脇遺跡などの集落が展開している。3kmほど北西には弥生後期の環濠集落である道蔵遺跡があり、ここでも広形銅矛が開墾時に出土している。また、1.5km南方の一の左右遺跡では、1644個のガラス玉が土壙墓から出土している。古墳時代には、豪族水沼君の本拠地として栄え、御塚・権現塚古墳をはじめとして、二子塚や銚子塚、鷲塚などの大型の古墳が存在する。ただ、二子塚、銚子塚は開墾により全面が削平されており、原型を全くとどめていない。本調査区を含む白口経塚遺跡では、6世紀後半の竪穴住居が第6次調査で検出されている。古代になると、三潞郡荒木郷の中心地として、周囲には集落が形成されていく。西ノ原遺跡では円面硯が出土している。白口経塚遺跡でも、竪穴住居や掘立柱建物、土坑、井戸などが検出されており、奈良時代をピークに、平安時代には集落は衰退していくようである。中世になると、荒木近藤氏の館を中心として、立小路遺跡や、小寺遺跡付近に街区を伴った集落が形成されていく。

3. 調査の記録

（1）調査の経過

住宅建設部分40㎡を対象に平成24年5月25日より重機による表土剥ぎを開始した。現地表面からー80cm程度で遺構面を検出した。同年5月28日より作業員を投入し遺構検出を行った。ピット多数と、



第34図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

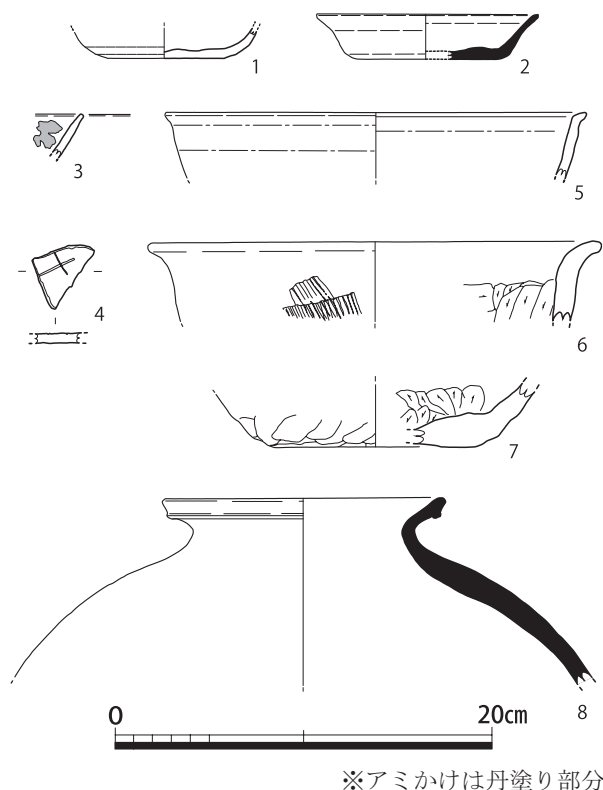
溝1条が検出された。遺構の掘削とトータルステーションによる測量を行い、5月30日に高所作業車による写真撮影を行い、翌31日に埋め戻し、調査を終えた。なお、遺構図はCUBIC社製ソフト「遺構くんCubic」を用いて作成した。現場写真はマミヤ6×7を用いて撮影した。

（2）検出遺構

ピット約40基を検出した。深さは30～40cm程度であり、比較的残りが良いようである。建物の柱穴と思われるが、並びが明確なものは無く、建物の様相は不明である。

（3）出土遺物

8の須恵器甕は試掘時に出土したものであり、遺構に伴うか不明である。S P 15出土1の土師器坏は底部外面に回転ヘラケズリを施しており、8世紀後半と思われる。S D 39出土2は須恵器坏である。8世紀後半と考えられる。S P 7出土3は内面丹塗りの土師器坏である。S P 5出土4は底部内面に×のヘラ記号がある。S D 39出土5は8世紀の土師器鉢である。S P 35出土6、S P 23出土7は古代の土師器甕である。



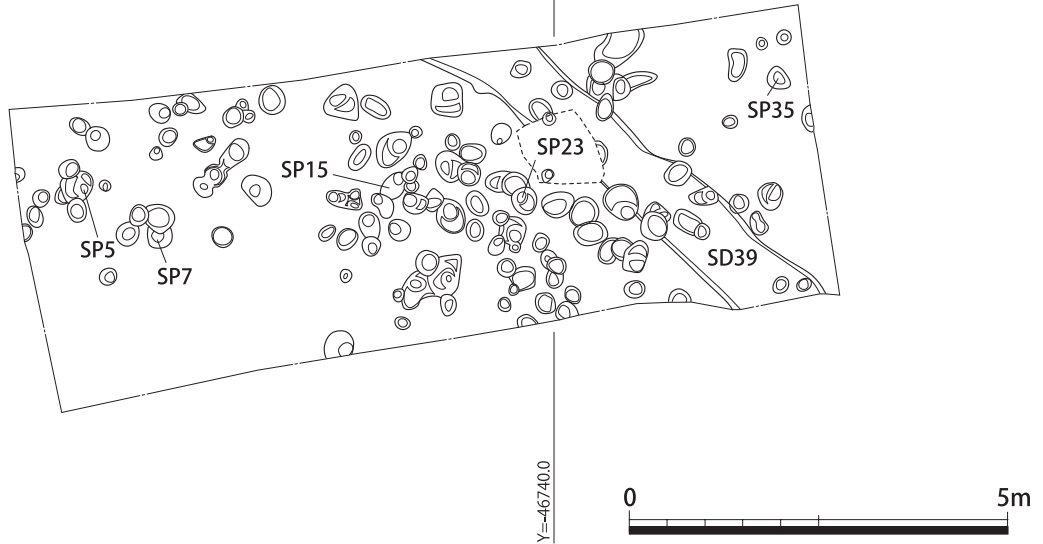
第35図 出土遺物実測図（1/4）

4. 総 括

今回の調査では、奈良時代の溝1条とピット40基程が検出された。調査区狭小のため、ピットの配列は不明であり、建物の様相は明らかでないが、何らかの建物が立つと思われ、律令期の荒木郷に含まれる集落の存在はあきらかである。本調査地は、西海道に近い微高地に位置し、上津荒木川と広川に挟まれた水陸の交通の要所である。道と川に挟まれたこの三角地帯には、律令期の集落遺跡が集中しており、西方の三潯郡衙と北東の筑後国府とを結ぶ重要な役割を持っていたことが窺える。古墳時代の豪族水沼君は、『日本書紀』雄略紀に見えるように、海上交通を管轄していたと考えられており、律令期以降も、この地域が渡海拠点であることにはさほど変化は無かったと考えられる。周囲には、中近世の川湊である住吉なども存在している。律令期の本調査地は、広川や上津荒木川、筑後川の水運と、西海道の陸運とを利用できる好立地であることから、租税の集積や出荷、生産などを主に担当していた可能性が考えられ、これからの調査の過程において明らかにしていくことが求められる。特に租税の生産に関しては、その地形から、米はもちろん、綿の生産についてもその存在を探求する必要があると考えられる。

（江頭）

X=+30670.0



第36図 調査区遺構配置図 (1/100)



第37図 調査区全景（西から）



第38図 SD39完掘状況（北西から）

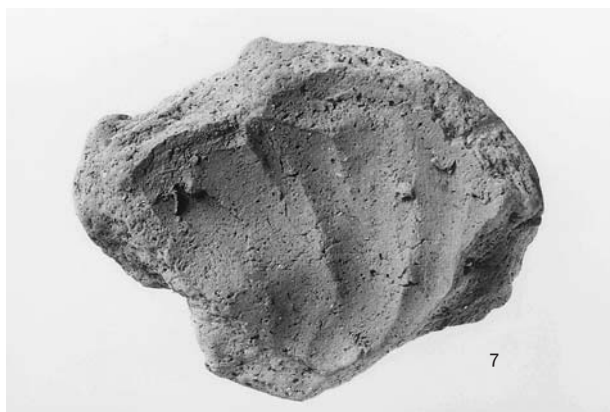
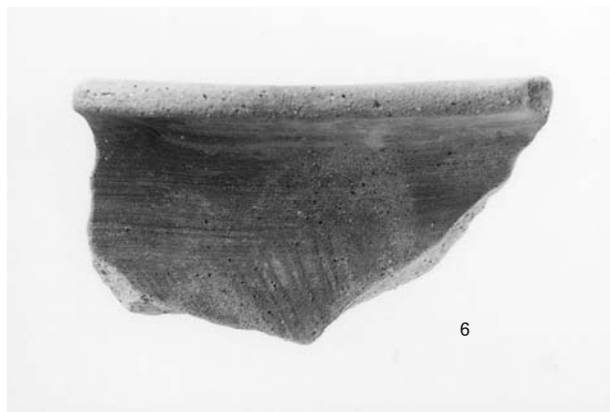
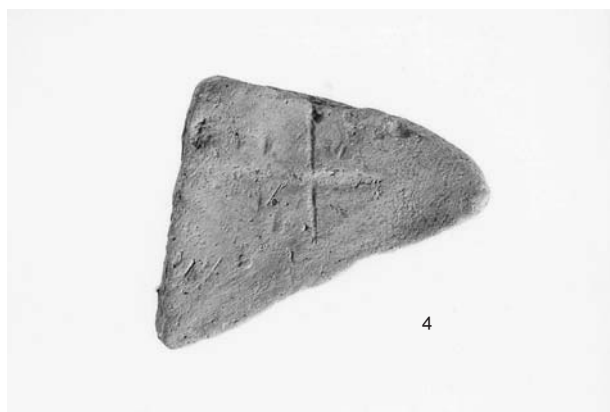


第39図 SD39土層断面（南東から）



第40図 調査地点から見た御塚古墳（東から）

VI. 白口経塚遺跡（第8次調査）



第41図 出土遺物写真

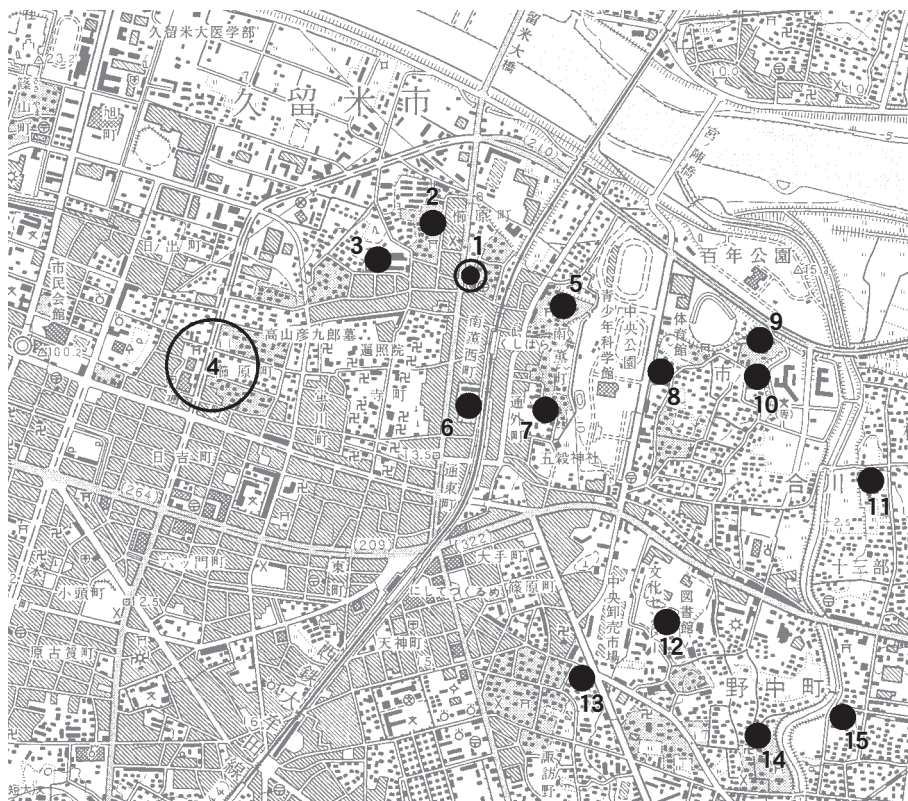
VII. 辻遺跡（第6次調査）

1. 調査に至る経過

本調査は、専用住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成24年6月20日、土地所有者より、久留米市東櫛原町字辻1418-2、1418-5における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である辻遺跡に含まれ、周辺では平成13年度に実施した第1次調査以降、5次に及ぶ調査を実施している。結果、弥生時代の甕棺墓・竪穴建物・貯蔵穴、中・近世の土坑・溝等が検出されており、対象地にも該期の遺構が展開すると予想された。その後の確認調査でも遺構の存在が確認できたことから、建物建設予定部分について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、平成24年7月25日に土地所有者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、現地調査を実施する運びとなった。調査期間は、平成24年8月8日から8月17日である。

2. 位置と環境

辻遺跡は久留米市街地の北東部、筑後川の氾濫原に突き出した低位段丘上に立地し、標高11～14mを測る。周辺には同様の低位段丘が存在し、その段丘上には多くの遺跡が立地する。特に弥生時代の甕棺墓群の立地が顕著で、東から久留米市内でも最も古い壺棺墓（板付Ⅱ式段階）が出土した



遺 跡 名

- 1 辻遺跡
- 2 石丸遺跡
- 3 東櫛原今寺遺跡
- 4 櫛原侍屋敷遺跡
- 5 南薫稻荷遺跡
- 6 南薫西遺跡
- 7 南薫本村遺跡
- 8 西屋敷遺跡
- 9 市ノ上北屋敷遺跡
- 10 市ノ上東屋敷遺跡
- 11 古宮遺跡
- 12 栗林遺跡
- 13 生尻遺跡
- 14 大園遺跡
- 15 東田遺跡

第42図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

市ノ上北屋敷遺跡、甕棺墓・石蓋土壇墓・木棺墓からなり、小型仿製鏡が出土した西屋敷遺跡、人骨が良好な状態で遺存していた甕棺墓や、市内では数少ない支石墓が検出された南薫稻荷遺跡が所在する。石丸遺跡は昭和2年京都大学による調査で管玉が出土して注目を集めた遺跡で、8次に及ぶ調査が実施されている。各調査で発見された甕棺墓は148基に及び、そのうち第3・6次調査で検出された80基は二列埋葬墓地の形態をとっており、この形態の墓地は筑後川以南では唯一の事例である。また、石丸遺跡の南西に位置する東櫛原今寺遺跡では、前期末の竪穴建物や貯蔵穴が確認され、居住域の南側には甕棺墓の広がりも見られる。



第43図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

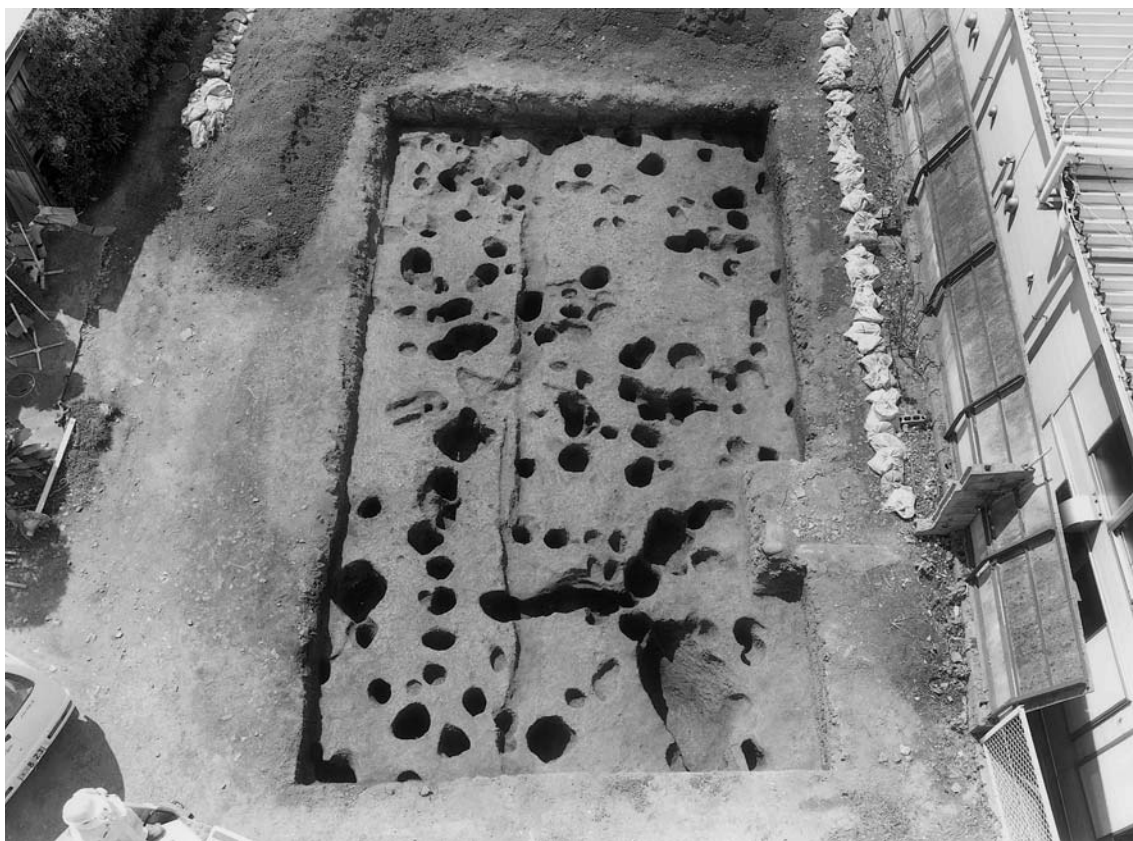
古墳時代の遺構については、前述した西屋敷遺跡で後期、東櫛原今寺遺跡で中期の竪穴建物が確認されているものの、大規模な遺跡は確認されていない。奈良時代の遺構に関しては、南薫南本村遺跡において土坑が検出されているほか、南薫西遺跡においても掘立柱建物や土坑が確認され、律令期の「節原郷」との関連を示唆する墨書土器が多数出土しており注目される。

平安時代については、大園遺跡で方形掘方を有する掘立柱建物や緑釉陶器、越州窯系青磁などが出土し、公的施設や居宅の存在を想起させる。東田遺跡からは小規模な道路遺構が検出された。中世期になると、石丸遺跡第6次調査で出土した大型銭（崇寧重寶）や同遺跡第7次調査で検出された当該期の遺構は、周辺に館等の存在を示唆するものと思われる。

3. 調査の記録

（1）調査の経過

本調査は専用住宅建設に先立つ調査で、調査面積は53㎡である。調査地の周辺は、国道3号線の東側に隣接し、宅地化が進行しているため、旧地形を留めていない場所が多いが、対象地は旧地形を保っていると考えられる低台地上に立地し、標高は約13mを測る。調査は平成24年8月8日に重機による表土剥ぎから始まり、同日、作業員により遺構検出、掘削を開始した。写真撮影・土層図



第44図 調査区全景（東から）

作成と並行し、遺構配置図の作成を実施した。すべての作業終了後に全体写真撮影を行い、8月17日に重機により埋め戻しを実施し、発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。土層図

(1/10) は手測り

で作製し、遺構配

置図はトータルス

テーションを用い、

その記録は株式会

社 CUBIC 製 ソフ

ト「遺構くんCubic」

で編集・保管して

いる。遺構の記録

写真は、マミヤ

RB67を用いてカ

ラーリバーサル・

モノクローム6×

7判で撮影した。



第45図 調査区遺構配置図 (1/100)

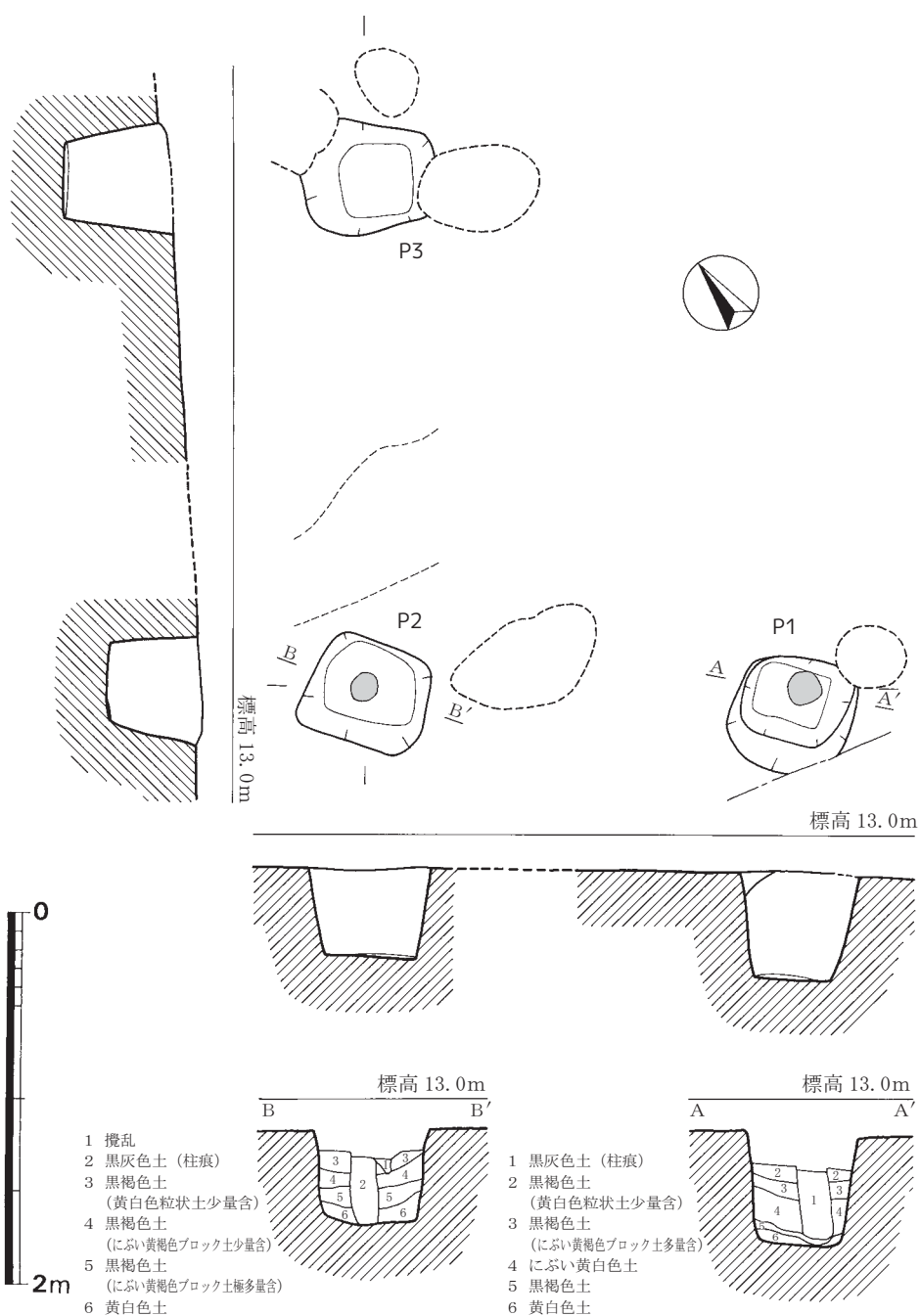
（2）遺構の概要

調査地は30～50cmの表土直下で遺構検出面である黄橙色土（地山）に至る。対象地は削平を受けていると考えられるが、検出した遺構の深度から、概して遺構の残存状況は良好であると思われる。本調査で検出した遺構は、弥生時代の掘立柱建物1棟およびピットである。以下、これらの遺構について、説明を加える。

掘立柱建物

S B 1（第45～48図）

調査区東側で検出した。北東～東側が調査区外に及ぶため全容は不明であるが、方位はN-32°-Eで、平面形式は1間×1間以上と思われる。柱間は南側が2.3mで、西側はP3で柱痕を検出できなかったため不明である。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺は0.5～0.7m、柱穴の底面レベルはP1・2が標高12.3～12.4m、P3が12.1mを測る。P1・2では柱痕を検出し、径約15cmであった。埋土は黒色系の土を基調とし、黄橙色のブロック土・粒状土を含む。P1・2の掘方埋土からは弥生土器の壺片、器台片が出土した。



第46図 S B 1 実測図（1/40）



第47図 SB 1-P 1 土層断面（南西から）



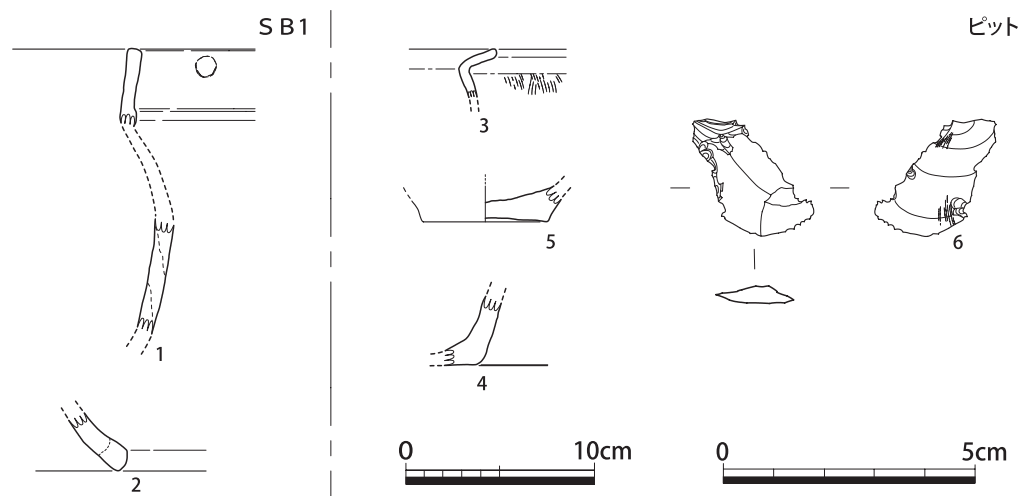
第48図 SB 1-P 2 土層断面（南西から）

ピット（第45図）

平面形は円形、楕円、倒卵形、不正形と多様で、規模は径が15～70cm程度で、深さが10～70cmを測る。埋土は黒色土のものと、褐色土のものが認められた。ピットの埋土内からは、弥生土器片30点、土師器細片1点、須恵器細片1点、黒曜石剥片1点が出土した。

（3）遺物の概要

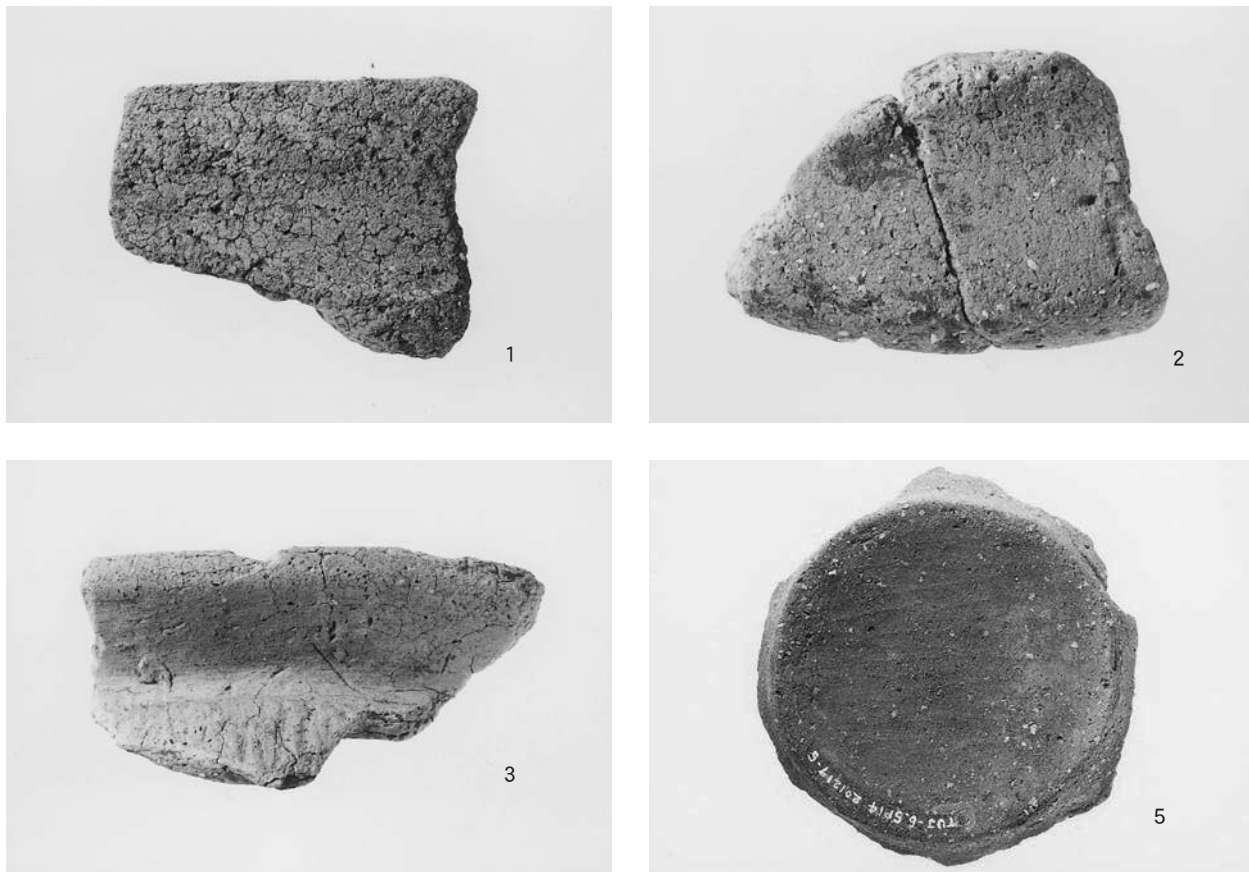
出土した遺物は、大半が弥生土器片であり、小袋2袋分である。詳細は、紙幅の都合により、遺物観察表を参照されたい。



第49図 出土遺物実測図（1/4・2/3）

第3表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器形	法 量			色 調		調 整		胎 土 (材質)	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第49図	SB 1 P 1	弥生土器	壺	—	—	(10.2)	橙	橙	ナデ 指押さえ	ナデ	砂粒（石英・長石・雲母・ 赤色粒子・角閃石）		201219 000001
2 第49図	SB 1 P 2	弥生土器	器台	—	—	(3.25)	橙	灰褐 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	砂粒（石英・長石・雲母）		201219 000002
3 第49図	S P 3	弥生土器	甕	—	—	(3.65)	橙	橙	ナデ	ナデ	砂粒（長石・石英・雲母・ 赤色粒子）		201219 000003
4 第49図	S P 5	弥生土器	甕	—	—	(2.8)	橙	にぶい橙	ナデ 刷毛目	ナデ	砂粒（角閃石・石英・赤 色粒子）		201219 000004
5 第49図	S P 14	弥生土器	壺	—	6.8	(1.8)	灰黄褐	黒褐	ナデ ミガキ	ナデ	砂粒（石英・長石・角閃 石・雲母）		201219 000005
6 第49図	S P 15	黒曜石	剥片	2.3	0.9～ 1.85	0.4	—	—	—	—	—	1.2 g	201219 000006



第50図 出土遺物写真

4. 総 括

本遺跡の調査は今回で6次を数え、弥生時代・中世・近世の3時期に画期を持つ複合遺跡であることが明らかとなっている。これらの中で弥生時代の遺構は、第1次調査においては、前期末の竪穴建物・土坑、中期の甕棺墓4基が確認された。台地の南端付近で実施された第2次調査では、調査面積は狭いものの、弥生時代をはじめとする遺構・遺物が確認された。第3次調査では、弥生時代の甕棺墓6基が検出され、本遺跡が立地する台地の南斜面に甕棺墓群が営まれることが分かっている。第4次においては弥生時代の遺構は確認されていないが、第5次調査では前期末の竪穴建物1軒、ピット群を検出した。

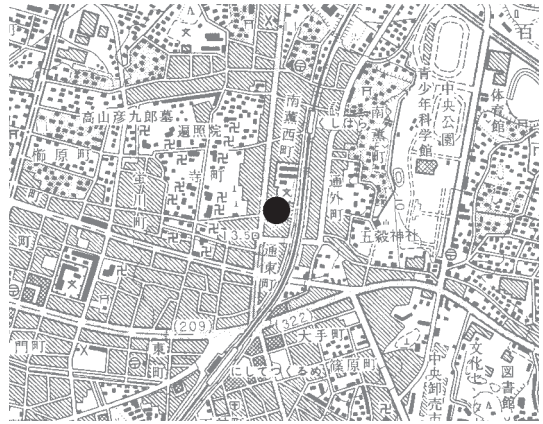
過去の調査成果から本遺跡では、弥生時代中期の甕棺墓群が営まれる以前に、比較的短期間居住域が広がっていたものと考えられた。しかし、今回の調査の結果、出土遺物から後期の所産と考えられる掘立柱建物1棟を検出しえたことから、中期の甕棺墓群が営まれて以後も、再び集落が形成されることが判明し、貴重な成果を得ることができた。調査地周辺は住宅密集地であり、十分な調査は望めないが、旧地形が比較的残存している東側において、今後、調査の進展が期待される。

（廣木）

VIII. 南薫西遺跡（第7次調査）

1. 調査に至る経緯

本調査は、平成24年5月10日に土地所有者から、久留米市南薫西町1984-1、1991-1についての「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに始まる。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である南薫西遺跡に含まれ、平成17年に小学校増築の際に発掘調査が行われた第6次調査の南西約50mに位置する。計画における専用住宅の基礎構造から判断して、遺構の保存が見込めないため、記録保存を行うべく発掘調査が必要である旨を地権者に伝えた。その後の協議の結果、専用住宅建設部分について発掘調査を行うことで合意し、調査の運びとなった。現地における調査期間は、平成24年5月22日から6月4日である。



第51図 調査地点の位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

本遺跡は、筑後川左岸に面した低台地上に立地する。標高は約14mを測る。周囲の台地上には弥生時代の遺跡が数多く立地し、中でも石丸遺跡、辻遺跡、南薫稻荷遺跡など前期末～中期の甕棺墓群が多く分布している。古代においては御井郡節原郷に含まれ、10世紀中頃には筑後国櫛原荘が安楽寺に寄進された記事が見られる。中世になると筑後川を介した河川交通の利便性からか石丸遺跡において輸入陶磁器のまとまった出土を見る。近世では久留米城南東に整備された町屋が建ち並び、現在の市街地形成の基礎を呈した。



第52図 調査地全景（北東から）

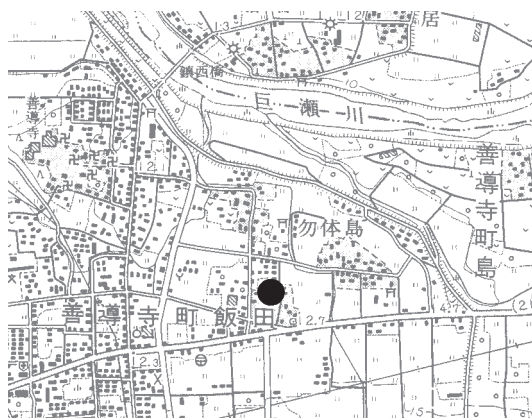
3. 調査の概要

遺構検出面は、攪乱により大きく破壊を受けていたものの、土坑3基、溝1条、ピット群が検出された。8～9世紀代の土坑・溝からは、転用硯や布目瓦が出土しており、御井郡節原郷における中心集落で、御井郡司の関与が想定された第6次調査の成果を追認する成果が得られた。（神保）

IX. 正覚山浄土寺飯田庵跡（第1次調査）

1. 調査に至る経緯

平成24年7月17日、土地所有者より、久留米市善導寺町飯田字東屋敷1062番5外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である正覚山浄土寺飯田庵跡の範囲内にあり、7月25日の試掘調査でも、地表下約1.1mで遺構を確認した。工事計画では、新築建物の杭が遺構面まで到達するため、協議を経て、同年8月23日から8月31日まで、現地での発掘調査を実施した。



第53図 調査地点の位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

本調査区は、巨瀬川左岸の自然堤防上、標高約12mの緩やかな斜面上に位置する。北西には、承元2年（1208年）開山の善導寺があり、浄土宗大本山として、多くの文化財を伝える。また、調査区の南側一帯には、条里の痕跡が現在も良好に残るが、古代の集落遺跡は見つかっておらず、その実体は不明な点が多い。



第54図 調査区全景（南東から）

3. 調査の概要

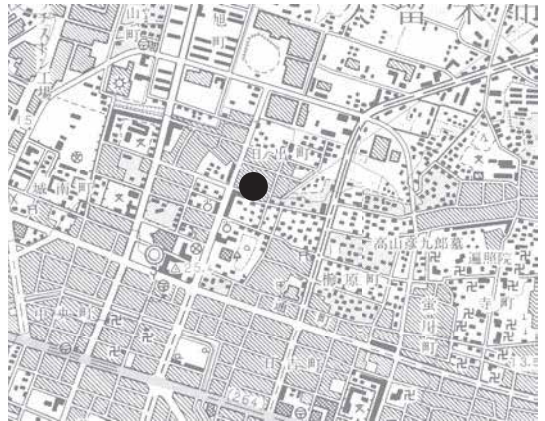
調査面積は64㎡である。掘立柱建物1基、溝1条、ピット多数を検出した。掘立柱建物は、1間×1間で、ほぼ南北方向に軸を有する。出土遺物は無いが、溝より後出する。溝は、現在の字界に平行して検出した。大半が調査区外にあるが、現存長8m、深さ約40cmを測る。後世の攪乱が著しいが、須恵器や糸切底の土師器坏身が出土した。このほか、ピットや表土から、口禿の白磁皿や龍泉窯系青磁蓮弁文碗、染付、土師器坏身、弥生土器などが出土した。

正覚山浄土寺は、建保6年（1218年）に敬蓮社入西上人が、草野永平の寄進で開山したという伝承があり、調査区の南西側には、入西上人を供養する石塔が立っている。輸入陶磁器の年代からも、13～14世紀に集落があったのは確かだろう。溝は、西へ2°偏位して走るが、旧山本郡の条里の向きと一致し、条里地割に伴う溝が、12世紀頃まで存続した可能性を示す。（西）

X. 久留米城外郭遺跡（第20次調査）

1. 調査に至る経緯

本調査は、平成24年8月1日付で土地所有者より提出された、久留米市篠山町字三丁目170-1における「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会に端を発する。対象地は、久留米城外郭の櫛原口に位置し、土塁と濠を隔てて東側に広がる櫛原小路から城内へ出入りする虎口部分にあたる。東隣接地での試掘確認調査の際も土塁基底が検出されている。当該地においても、土塁上部は削平されて平坦地となっており、既存の専用住宅がある。しかし、地下には土塁遺構の一部が残存していることが想定された。現地での調査期間は、平成24年8月29日～同年8月31日である。



第55図 調査地点の位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

筑後川中流左岸に形成された低位段丘上に立地する。調査地付近の標高は、約10mである。外郭の北辺・東辺は、旧城の地形が比較的良く残存しており、東辺では、部分的にはあるが、土塁の一部や、堀が埋め込まれた状態で溝状に残る部分もある。



第56図 調査区全景（南から）

3. 調査の概要

想定通り、久留米城外郭の土塁基底と堀状遺構を検出し、土塁の構築過程を知る上で、貴重なデータが得られた。北辺土塁部分については、堀の掘削土を幅約3m、高さ約1mの規模で、比較的密に突き固め積み上げる。平面・断面での観察から、その過程で、適宜土嚢を使用し補強しながらの作業であった事が判明した。堀部分は、筑後川の氾濫原であり、掘削土は砂礫であり崩壊しやすいためであろう。次の工程では、その背後に荒く砂礫土を託して基底幅を広げ、最後にこれらの上に砂礫土を積んで、高めたと思われる。枡形の土塁については、北辺土塁の背後に、種類が異なる粘土を互層に積み上げて構築される。なお、土塁下にはそれ以前の堀状遺構（幅6.8m、深さ1.3m）が発見され、その時期と機能については、今後検討が必要であろう。（小澤）

報告書抄録(1)

ふりがな	へいせい24ねんど　くるめしないいせきぐん								
書名	平成24年度　久留米市内遺跡群								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第313集								
編著者名	小澤太郎(編)・神保公久・熊代昌之・江頭俊介・廣木　誠・西　拓巳								
編集機関	久留米市役所　市民文化部　文化財保護課								
所在地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15番地3　TEL 0942-30-9225　FAX 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp								
発行年月日	平成25 (2013) 年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コ　　ド 市町村　遺跡番号		北緯 。　。　。	東経 。　。　。	調査期間	調査 面積	調査原因
つかざきいせき 塚崎遺跡 だい1じちようさ 第1次調査	くるめしみずまち 久留米市三潴町 たかみずま 高三潴156-2ほか		40203	—	33° 15′ 52″	130° 27′ 21″	20111018 ～ 20111028	17㎡	試掘・確認調査
所収遺跡名	種　別	時　代	主　な　遺　構		主　な　遺　物		特　記　事　項		
塚崎遺跡 第1次調査	集落	弥生	土坑 溝 柱穴 4基 1条		弥生土器・石器		弥生時代中期～後期にか けての集落跡。		
要　　約									
調査地は、広川左岸域に形成された標高約6mの低台地上に位置する。江戸時代に細形銅剣2本が出土した御 廟塚貝塚の西側に所在する。弥生時代前期末～中期前半ころを中心に、一部後期にいたる土坑や溝、掘立柱建物を を構成すると考えられる柱穴などを検出した。遺物は主に土坑から、土器や石器など生活用品が出土している。									
土木工事の届出日		平成23年10月5日			遺物の発見届日		平成23年11月1日 (23文財第768号)		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コ　　ド 市町村　遺跡番号		北緯 。　。　。	東経 。　。　。	調査期間	調査 面積	調査原因
さいかいどう 西海道跡 だい3じちようさ 第3次調査	くるめし 久留米市 あらきまちあらき 荒木町荒木24-1ほか		40203	—	33° 16′ 32″	130° 30′ 48″	20111116 ～ 20111124	52㎡	試掘・確認調査
所収遺跡名	種　別	時　代	主　な　遺　構		主　な　遺　物		特　記　事　項		
西海道跡 第3次調査	道路跡	古代 ～ 中世 現代	溝 土坑 1条 1基		土師器		西海道推定路線上で野添 川旧流路と交差する地点。 河川作用と地下げで、遺 跡は既に失われた可能性 がある。		
要　　約									
調査地の北東約1.3kmの地点で実施された車地遺跡第3次調査では、路面幅約9mで両側溝を持つ道路遺構が検 出されている。また、南方約300mの地点は「車路」の地名が残り、木下良氏によって歴史地理学的な見地から、 西海道路線が推定されていた。調査地点はこの推定路線にあたり、西流する野添川の急流路と交差する位置に ある。しかし、関連遺構は全く検出されなかった。河川的作用によって流出したか、もしくは地下げで削平され たのか、あるいはそれらが複合要因となり消滅したのか定かではない。									
土木工事の届出日		平成23年11月2日			遺物の発見届日		平成23年11月29日 (23文財第839号)		

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ぜんどう じ けいだい い せき 善導寺境内遺跡 第 10 次 調 査	くる め し 久留米市 ぜんどう じ まちい い だ 善導寺町飯田550		40203	—	33° 19′ 49″	130° 36′ 12″	20120319	23m ²	試掘・確認調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
善道寺境内遺跡 第 10 次 調 査	社寺	中世	土坑 溝	2 基 1 条	土師器		低台地北端部で、遺構の 密度が低く、残りも悪い。		
要 約									
調査地は善導寺本堂の裏手にあたり、巨瀬川の氾濫原に面する低位段丘端部に位置する。これより北側は段丘崖となっており、急激に標高を下げる。このような状況であるためか、遺構密度は低く、かつ深さも浅く残りは極めて悪い。情報量も極めて少ないが、これらの遺構は、S K10からの出土遺物により、中世頃の年代が考えられるのみである。									
土木工事の届出日		平成23年 9 月16日			遺物の発見届日		平成24年 3 月22日 (23文財第1230号)		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
くる め じょうか まちい せき 久留米城下町遺跡 第 19 次 調 査	くる め し 久留米市 ちゅうおうまち 中央町15-3 ほか		40203	—	33° 19′ 16″	130° 30′ 19″	20120419 ～ 20120423	36m ²	確認調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
久留米城下町遺跡 第 19 次 調 査	集落	近世	溝	1 条	近世陶磁器		築島町と新道との町境の 調査		
要 約									
城下町の屋敷境を確認することを目的とした調査である。片岩を6～7段ほど平積みした石組溝 1 条を検出した。存続年代は、18世紀末～19世紀中頃である。溝埋没後の明治以降は、石組溝間に石列を並べ境界を標示している。この石組溝 S D 1 は、天保年間久留米城下図にある築島町と新道の境界線に比定される。この両町の間には道路がと描かれているため、S D 1 は道路東側の側溝となろう。									
土木工事の届出日		平成24年 4 月12日			遺物の発見届日		平成24年 4 月24日 (24文財第133号)		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
しら ぐち きょうづか い せき 白口経塚遺跡 第 8 次 調 査	くる め し あらき まち 久留米市荒木町 しらぐち 白口2361-12ほか		40203	—	33° 17′ 34″	130° 20′ 8″	20120525 ～ 20120531	40m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
白口経塚遺跡 第 8 次 調 査	集落	奈良	溝 ピット	1 条 40 基	土師器・須恵器		古代筑後国三潯郡荒木郷 に含まれる集落の一角		
要 約									
本調査地は、西海道に近い微高地上に位置し、上津荒木川と広川に挟まれた水陸の交通の要所である。道と川に挟まれたこの三角地帯には、律令期の集落遺跡が集中しており、西方の三潯郡衙と北東の筑後国府とを結ぶ重要な役割を持っていたことがうかがえる。検出遺構は、溝 1 条と掘立柱建物の柱穴と考えられるピットである。調査区が狭いため、建物の規模や配置は明らかでないが、律令期の荒木郷に含まれる集落であった可能性が高い。									
土木工事の届出日		平成24年 5 月24日			遺物の発見届日		平成24年 6 月 5 日 (24文財第288号)		

報告書抄録(3)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
つじ い せき 辻 遺 跡 だい 6 じ ちょう さ 第 6 次 調 査	く る め し 久留米市 ひがしくしわらまち 東櫛原町1418-2・-5		40203	—	33° 19′ 19″	130° 31′ 25″	20120808 ～ 20120817	53㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
辻 遺 跡 第 6 次 調 査	集落	弥生	掘立柱建物 ピット	1 棟 多数	弥生土器 石器		弥生時代後期の集落跡を 確認。		
要 約									
調査地は、久留米市街地の北東部に位置し、筑後川左岸の氾濫原に突出した低位段丘上に立地する。標高は13.0mを測る。調査の結果、掘立柱建物1棟とピット多数を検出した。掘立柱建物については、平面形式1間×1間以上の規模で、出土遺物から弥生時代後期の所産と推定される。過去の調査成果から本遺跡では、弥生時代中期の甕棺墓群が営まれる以前に、比較的短期間居住域が広がっていたものと考えられた。しかし、今回の調査の結果、弥生時代後期の掘立柱建物を検出したことから、中期の甕棺墓群が営まれて以後も、再び集落が形成されることが判明した。									
土木工事の届出日		平成24年7月10日			遺物の発見届日		平成24年8月22日 (24文財第583号)		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
なん くん にし い せき 南 薫 西 遺 跡 だい 7 じ ちょう さ 第 7 次 調 査	く る め し 久留米市 なんくんにしまち 南薫西町1984-1ほか		40203	—	33° 19′ 1″	130° 31′ 22″	20120522 ～ 20120604	48㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
南 薫 西 遺 跡 第 7 次 調 査	集落	奈良 平安	土坑 溝 ピット	3 基 1 条	土師器、須恵器、馬歯 古瓦、近世陶磁器		古代筑後国御井郡櫛原郷 の集落		
要 約									
調査地は、筑後川左岸に形成された標高14m低台地上に位置する。周辺には弥生時代の集落や甕棺墓群が数多く認められる。今回は8～9世紀代の土坑3基、溝1条などが検出され、転用硯や布目瓦の出土から、筑後国御井郡節原郷における中心的な集落と思われる。									
土木工事の届出日		平成24年6月1日			遺物の発見届日		平成24年6月6日 (24文財第284号)		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 。 〃	東経 。 。 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
しょうがく さんじょう じ 正 覚 山 浄 土 寺 いい だ あん あと 飯 田 庵 跡 だい 1 じ ちょう さ 第 1 次 調 査	く る め し ぜんどう じまち 久留米市善導寺町 いい だ 飯田1062-5 ほか		40203	—	33° 19′ 33″	130° 36′ 44″	20120823 ～ 20120831	64㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
正 覚 山 浄 土 寺 飯 田 庵 跡 第 1 次 調 査	寺院跡 条里	奈良 平安 鎌倉 近世	掘立柱建物 溝 ピット	1 基 1 条	弥生土器、土師器、須 恵器、中世陶磁器、染 付		13～14世紀の遺物が出土。 条里と同じ方向に走る溝 を検出。		
要 約									
調査地は、巨瀬川左岸の自然堤防上に位置し、建保6年(1218年)開山とされる正覚山浄土寺の伝承地である。中世以降の掘立柱建物1基のほか、旧山本郡の条里と同じく、西へ2° 偏位する溝を検出し、12世紀ごろまで条里地割の溝が存続していた可能性がある。また、13～14世紀の輸入陶磁器が出土し、鎌倉時代に集落があったと思われる。									
土木工事の届出日		平成24年8月6日			遺物の発見届日		平成24年9月4日 (24文財第651号)		

報告書抄録(4)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コ ー ド		北緯 。 ′ ″	東経 。 ′ ″	調査期間	調査 面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
く り め じ ょ う そ と ぐ る わ い せ き 久留米城外郭遺跡 だい 20 じ ち ょ う さ 第 20 次 調 査	く り め し 久留米市 さ さ や ま ま ち 篠山町170-1		40203	—	33° 19′ 16″	130° 30′ 43″	20120829 ～ 20120831	14m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
久留米城外郭遺跡 第 20 次 調 査	城館跡	近世	土塁 堀 溝	1 基 1 条 1 条	なし		近世久留米城外郭の土塁 線の調査		
要 約									
調査地は、久留米城外郭の北東隅部にあたる。ここは、土塁と堀を挟んで東に位置する櫛原小路から城内へ出入りする櫛原口であり、枡形を形成する土塁の検出を目的として調査した。結果、現地表下には良好な状態で土塁積み土が残存していることが判明した。外郭北辺土塁は、土嚢を基礎に、外堀の掘削土である砂礫を積み上げている状況が見られた。枡形の土塁は、これに粘土を混じりの土を託して積み上げている。なお、土塁下部に幅6.8mの濠状遺構が存在することが判明した。その機能や築造時期をふくめ、新たな論議を提供することになった。									
土木工事の届出日		平成24年 8 月21日			遺物の発見届日		—		

平成24年度

久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第333集

平成25 (2013) 年 3 月 31 日 発行

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市役所
市民文化部文化財保護課

印 刷 香和印刷株式会社